

バカとテストと召喚獣～三年生～

10ten

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

吉井明久が二年生最後の日に木下優子に告白して春休み勉強をたくさんした。

そんな明久達の三年生を書いてみました。

目次

新しい一年の開幕

僕と告白とクラス替え

キャラのクラス発表

衝撃の史実

明久がいないFクラス

明久が居るAクラス

A対F変わらない戦い

奇襲VS正当防衛AとFの前哨戦

A対F変わらない戦いの日々

A対F変わらない戦い2

A対F変わらない戦い3

変わりある戦いA対F決着

明久召喚獣紹介

バツゲーム

清涼祭

清涼祭ダイジェスト

合宿と壊れる輪

特例のAクラス

突然の事態

閑話

病院での手術

天界での修行

帰って来た男

復活せよAクラス

75 72 65 62 58 51 47 42 37 34 30 26 22 18 15 10 7 5 3 1

決戦 僕は君たちを許さない

78

ブチ切れ

81

決着暴走する者止める者

85

卒業前の学園生活

姉の襲来

91

姉弟の上の方は下の方のことを大体知っている

94

やはりこの学校が平和になることはない

97

新しい一年の開幕 僕と告白とクラス替え

「木下さん、僕は気づいたんです。最初は秀吉と似ているせいだと思ったけど違った事に気がついた。：僕は君の事が好きです。付き合ってください。」

「といい手を前に出すと、

「こちらこそ、よろしくね吉井君…いいえ、明久。」

「ありがとう、木下さん」

これが僕吉井明久の二年生最後の大会だった。そして二年生最後の学校つまり修業式の日の日である。

春休み、僕はたくさん勉強をした。何故かって？それは僕の彼女の優子と同じクラスになるためだよ！！

優子もこれには応援してくれてる。週に4、5回は勉強を教えるもらっている。

ちなみに僕と優子が付き合ってる事は誰も知らないよ。

～三年生振り分け試験～

すごい、すごいよ去年は全然解けなかったのに今回はスラスラ解ける。優子のおかげだな。

明久、頑張ってるかな？まさか解答欄の場所を間違えてたりして…：…いやまさかね、流石に無いわよね。フラグじゃないわよね…：心配だわ…

ん…は！！解答欄の場所を間違えていた。いや～危なかったな。

～クラス発表～

いよいよクラス発表の日だ…：なのに

明「寝坊したあああああああ～く～く～く～く～く～く～く」

鉄…西「遅いぞ！！吉井！！」

明「おはようございます。鉄人。」

西「西村先生と呼べばかもの!!」

明「はくい西村鉄人先生。」

西「初日から早々補修室に行きたいのか貴様は!!・・・まあいいほ
れ、今回のクラスだ。」

明「ありがとうございます。」

西「吉井、この二年間お前を見てきてこいつは馬鹿だと確信してい
たが人とはやれば出来るんだな。」

吉井 明久 Aクラス 次席

西「お前はやれば出来るバカだったんだな。」

明「いいつやあたああああああ。」

西「最後の一年間、思いつきり楽しんで来い。」

キャラのクラス発表

主人公

吉井 明久

Aクラス

次席

優子と付き合ってAクラスを目指して春休み勉強に全てを費やした。

ヒロイン

木下 優子

Aクラス

春休み明久に勉強を教えていたため少し点数は落ちたがそれでもAクラスの上位に入っている

坂本 雄二

Fクラス代表

勉強だけではないところを見せようとするところは変わらない。しかし、明久がAクラスにいった事を悔いている

姫路 瑞樹 Fクラス

また、本番の時に風邪をひいてしまったが内心はFクラスで喜んでいるのだが…

霧島 翔子

Aクラス代表 首席

去年同様に首席となるが学園のビリから次席まで上がった明久を尊敬している。

久保 利光 Aクラス

姫路と次席争いをしていたが次席は明久に取られてしまったが、そこまで努力した明久を尊敬している。

木下 秀吉 Fクラス

土屋 康太 Fクラス

島田 美波 Fクラス

工藤 愛子 Aクラス

FF F団 団員ほとんどFクラス 数名Eクラス
この人たちは、原作とほとんど変わりません。

次は各クラスの代表

Bクラス代表 小山優香

自分よりバカの人には興味がなく根本と別れいい男を探している。また、いい男がいないため今は勉強に打ち込んでいます。

Cクラス代表 根本 恭二

カンニングを警戒されさらに元Fクラスに色々といじられてあらゆる噂がたれられたため学力ダウンしてしまいそのせいで小山と別れてしまった。だからいまはずるい事を考えながら学力をあげている。

D' Eクラス代表

平賀 中林

ここも変わらない。

衝撃の史実

く雄二く

つんだよ明久、また遅刻か

雄「お前ら、明久はどこだ？」

島「ん？アキ？そういえば今日はあつてないわね。」

秀「わしもじゃの、また寝坊では無いか？」

康「：右に同じ」

雄「くたくつあいつまた遅刻かよ。」

秀「いや、もしかしたら違うクラスに言ったのでは？」

雄、島「「ないない」」

康「：あいつは永遠のFクラス…」

秀「すごい信頼（？）じゃのう。ま、わしも無いとは思ったけどのう。」

『ガラ』

？「遅れてすいm「早く座れこのうじm…姫路？」

姫「はい、すいません」

雄「いやいいんだが…何故ここに？」

姫「えつと…その…また風邪をひいてしまつて」

雄「0点あつかいなのか」

姫「はい…ところで明久君は？」

雄「ああ、あいつは遅刻だ。」

『ガラ』

雄「早く座れこのうz…先生でしたか」

福「では、朝のHRと自己紹介をしましょう。」

く明久く

やば、もう朝のHR始まつちやつてるよ。

『ガラ』

明「遅れてすいません」

？「いいえ、大丈夫ですけどもつと早く来るようにしましょう」

明「はくい」

Aクラスモブ全員「「なんでお前がここにいるんだよおおおお
くくく」」

明「？」

優（明久!! Aクラスなんだ! 私信じてたよ。）

明「いや、なんでも何もここがクラスだからだよ」

モブ「でもお前観察処分者だろ」「馬鹿の代名詞じゃないか」「カン
ニングでもしたんじゃないか?」

?「それはあり得ません、私たちがそんな行為を見逃すはずがあり
ません。」

明「と言う事で、よろしく♪」

?「では次は自己紹介でしたね。代表の霧島さんお願いします。」

翔「：霧島翔子です。」

あんなのでいいのか!!

?「では、窓側から順に行きましょう。」

愛「はくい、工藤愛子です。・・・」

く以下略

?「では、今日の朝のHRを終わりにします。」

く雄二

あいつがこねえええええ

明久がいないFクラス

くFクラスく

明久やつ初日からサボりか？・・・いや、いくらなんでもあいつがサボるとは思えねえ、かと言って他のクラスに行ったとも思えねえし、本格的に休んだのか？遂に寝る所も失ったとかで…

秀「雄二よ、さつきからブツブツと何を考えておる？」

雄「ああ、ちよつと明久の事でな…」

秀「また考えておるのか、お主もなんだかんだで明久の事を気にしてるのう。」

雄「ああ、明久をいじめられなきや学校に来る意味がねえからな。」

秀「お、お主も悪よのう。」

雄「ああ、島田にやあ負けるけどな。」

島「なんか言った？坂本。」

雄「いやなに、明久の奴がこねえなーって話してただけだ。」

島「そうね、寝坊かなにかかしら、欠席とは考えにくいしね。」

こいつは明久が他のクラスに行った事すら考えてねえな。

姫「明久君大丈夫でしょうか？お菓子でも作って帰りによりましようかね？」

雄「おう、いいぞいいぞもってってやれ、明久も喜ぶだろう。」

康「明久がこないと変な感じ…」

秀「なんやかんやで皆明久を心配してるのう。」

雄&島「いやいや」

雄「俺はいじめる相手が欲しいだけだ。」

島「私は殴るアキが欲しいだけよ。」

雄「まああいつの事だ、いつか、来るだろ。」

時はこくこくと経ち

く昼休みく

あいつこねええええええええ

姫「明久君こないですね。」

秀「旅行中で帰ってこれてないとかかのう。」

康「…そんな金明久が持つてる訳がない。」

雄「いねえ奴にどうこう言っても意味がねえ。とりあえず、飯にすつぞろ。」

秀「それでは、恒例のアレをやるかのう。」

雄「いくぞお〜」

雄、秀、康、姫、島「「ジャンケン　ポン」」

雄二　　パー

秀吉　　チヨキ

康太　　チヨキ

姫路　　チヨキ

島田　　チヨキ

秀「今日は雄二かのう、わしはお〜〇お茶じゃ」

康「…ドクターペ〇パー…」

姫「すいません、ヘル〇アでお願いします。」

島「うちはカフェ〇レ」

雄「わーたよ、行ってくる。」

秀「いつもの所におけるからの」

　　〜屋上〜

あ〜だるかった

雄「皆買ってkうをお」

姫「あ、坂本君ありがとうございます。坂本君もお弁当食べて下さいね。」

ゑッ

姫「今日は始業式ですしね。やる気満々でしたから、いいのができたと思いますよ。」

雄、秀、康、「「殺る気満々だと!!」」

島「じゃあいただこうかしらね。」

雄「まで、いま人影が見えたから明久かもしれないな。島田と姫路、みてきてくれるか?」

姫「明久君、きたんですか!?!」

島「しよ、しょうがないわね。」

『ダツ』

よし、二人とも行つたな、あとは俺等三人のなかの誰が逝くのかだな。

雄「明久がいれば一発なんだけどな…」

康「今日は明久がない…」

秀「うむ、だれかが食べんどのう」

雄「よし、全員で一気に食うぞ。三段だから、ちようど一人一段だな。」

秀「うむ、それがよからう」

康「…生きてまた会おう」

そのあと、きずいたら教室にいて、五時間目がおわっていた。

く放課後く

あああああやつと帰れる

島「結局アキの奴来なかったわね。」

雄「全員でよってみるか？明久の家。」

秀「そうじゃな」

康「…伝令」

雄「ん、どうしたムツツリーニ？」

康「明久の姿、Aクラスで確認」

明久が居るAクラス

く朝のHR後のAクラスく

愛「いやくそれにしても驚いたね。まさか吉井君がAクラス、それも次席になるなんて、きつといっぱい努力したんだろうなく」

久「全くだよ、春休みの間勉強をサボっていたつもりはないんだけどね、春休みの間に抜かされてしまうとは。」

翔「…吉井は元々勉強を頑張っていたらAクラスに入れるほどの実力は持っていた。」

愛「それなのに勉強をサボっていたってなんかすごいね。」

明「ありがとう皆、あとお願いんだけど二年生からの友達なんだし明久でいいよ。」

久「じゃあそう呼ばせてもらうよ。明久君」

翔「…私も翔子でいい明久」

愛「じゃあ僕も愛子でいいよ明久君」

明「うん、よろしくね。久保君、翔子さん、愛子さん。」

愛「あれ、優子は？」

翔「…優子なら、先生と一緒に職員室に行った。」

久「そう考えると、先生の手伝いかな？」

明「やばい観察処分者は僕なのに、行ってくるね。」

ダッ

く職員室前く

明「優子!!」

優「あ、明久君!!」

明「プリントは僕が持つよ。」

優「ううん、そこまで多くないし私が持つていくよ。」

明「前が見えなくなるぐらいの量を世間では少ないと言わないよ」

優「ううん、本当にだいじよ『ズルツ』きやあ」

おおっと『ガシ』

明「優子大丈夫？」

優「うん・・・／／大丈夫だから・・・／／」

明「だからいったでしょ、転んだのが僕の方で良かったけど…その…ほら優子が怪我をするのは僕もやだから…／＼／」

優「あき…ひさ…くん…／＼／」
ずつとこうしていたが周りの視線が厳しい。

「木下さんってあの吉井とつきあってるの?」「え、あの馬鹿と?」

などと話し声が聞こえるが大体、とゆうか全部に僕の悪口が含まれているが、僕は優子じゃなければどうでもいい。

優「いま明久君を馬鹿にした人出てきなさい。殺してあげるわ」
代わりに優子が暴走した。

明「優子、落ち着い」
「あんな人にぞっこんなんて木下さんって…」
おい、いま優子の悪口言ったやつ出て来い殺して殺るよ。」

おおっといけない、僕も暴走していかない所に『殺』の字が入ってしまつたな。

「ちよ、ちよつと待って謝るわ」「ああ、俺等が悪かった」「だから許して」

優子と僕は笑って

「無理」

そう答えたあと、そこ周辺は地獄と化した。(新校舎なのでEFクラスの人は職員室に行った人以外この事件を知りません。)

く昼休みく

明「いや〜疲れたなあ〜」

愛「でも、本当に勉強をしてきたんだね〜なんでかな〜?」

明「理由もなにもAクラスに入りたかった、それだけだよ…約束もしたしね好きな人と」

優「……………／＼／」

愛「どうしたの〜優子、顔が赤いけど♪」

この顔はすべて知ってるな愛子さんは…

優「べ、べちゅひにやんとともにやいんだきやらね」

翔「優子…噛みすぎ…」

優「別になんともないんだからね。」

明「それにしても教室でお昼食べるの久しぶりだな」

久「そうなのかい？明久君」

明「うん、Fクラスの教室はホコリが舞ってるからね。いつも屋上で食べてたよ。」

久「そうなんだ、つくづくすごい教室だと思うよFクラスはね。」

愛「それよりもそろそろ食べない？僕お腹ぺこぺこだよ。」

明「そうだね。いただこうよ」

「「いただきます」」

この頃は明久は生活を見直して親の寄付金を上手に使ってます。

愛「明久君の料理はいつみても美味しそうだね。」

久「本当、すごい出来だよね。」

優「……」

翔「：美味しそう」

明「良かったら皆食べる？」

久「いいのかい？」

愛「そうだよ。僕たちはお弁当を持ってきてるのに」

明「じゃあ交換しない？」

翔「：いいの？」

明「もちろん」

久「じゃあ遠慮なく、僕は卵焼きをもらおうかな」

明「じゃあ僕はアスパラをもらおうかな」

明久↓卵焼き↓久保

久保↓アスパラガス↓明久

トレード完了

愛「じゃあ僕は生姜焼きをもらおうかな」

明「じゃあカツもらえる？」

明久↓生姜焼き↓愛子

愛子↓カツ↓明久

トレード完了

翔「私は：トマトを……」

明「じゃあ僕は……」

翔子の弁当↓米と海苔で作った雄二弁当
これじゃあ取れないじゃないか

翔「心配しないで：おかずの方もある。」
ほっ良かったこっちは…

こちらも雄二弁当

明「これじゃあ取れないじゃないか!!」
翔「？」

明「いいよただであげるよ。」

明久↓トマト↓翔子

移籍完了

明「：優子？」

優「えっ!! なになに」

明「優子はいいの？」

優「えっ!! あっ、じゃあ漬物を」

明「はい」

優「えっ!!」

明「優子弁当少ないからサービスだよ」

優「あ、ありがとう。」

明久↓漬物↓優子

移籍完了

明「じゃあ食べよつか」

時は経ち

く放課後く

明「じゃあ帰ろつか」

優「うん、」

『ひさああああ』

ん、なんの声だ？

『きひさあああああ』

聞き覚えのある声だな

雄『あきひさあああああ』

おっと、僕の悪友じゃないか

雄 「どういう事だ!!」
明 「こつちがなんだけど!!」

A対F変わらない戦い

奇襲VS正当防衛AとFの前哨戦

くFクラスく

馬鹿な明久がAクラスだとそんなのが信じれるか!!

『ダッ』

秀「ゆ、雄二!!」

島「うちも行くわ、Aクラスに行ったアキをお仕置きしに」

『ダッ』

姫「私も行きますねく」

秀「お、お主ら…仕方ないムツツリーニ、いくぞ」

康『コク』

F F F 団「吉井の奴がAクラスに行ったらしい」「馬鹿の癖に」「やっちやうよー」

『『裏切り者には死有るのみ』』

くAクラスく

明「さあ、帰ろうか」

雄「明久てめえ」

島「アキ、どう言う事?」

姫「明久、なんでFクラスじゃないんですか?」

F F F 『『裏切り者には死をおおおお』』

明「なんでFクラスのみんながここに居るのおおお」

雄「明久どんな魔法を使ったんだ!」

へえ?

島「そうよ、アキがまともにAクラスに入れるわけがないわ」

姫「明久君、カンニングはいけない事なんですよ」

明「ひどいよ、僕なにもしてないのに」

雄「ほら、さっさと帰るぞ」

明「ちよつと待って雄二、僕はAクラスでFクラスじゃないんだよ」

島「アキ、あとで話はたっぷり聞くから」
姫「明久君、おいたはダメですよ。」

翔「：待って：雄二」

優「そうよ、待ちなさいよ。明久君をどうするつもり？」

雄「ただ、Fクラスに連れ戻すだけだが？」

久「そんな事はさせないよ」

愛「そうだね、明久君はもうAクラスの仲間だからね」

島「アキ、どうしてAクラスの女子と仲がいいのかしら？」

姫「明久君は、女の子と仲良くしてはいけません。」

明「えっ!!なんで、てゆうか島田さん僕の足に四文字固をかけない
でええええええ」

島「さあ死になさい」

優「やめてって言うてるでしょ」

と言つて優子は僕を救質してくれた。

島「ちよつとなにすんによ、アキへのお仕置きはまだ終わってない
んだから!!」

優「だからやめなさいって言うてるのよ」

明「ありがとう優子、それに翔子さん、愛子さんも久保君もありが
とう」

島「な、何するのよ、アキへのお仕置きを邪魔しないで!!」

優「だから邪魔してるのよ、馬鹿じゃない?...そっかFクラスの帰
国子女さんだったもんね」

島「ムキー、あんたはアキの何なのよ!!」

優「明久君は私の大事なクラスメイト、そして彼氏よ!!!!」

「「「「「.....はぁ☒☒」

☒「「「「」

明「ちよつ優子、ここでその発言は...」

優「へえ?... (ボン) / / /」

ああ、顔が赤くなって恥ずかしがる優子も可愛いなあ。
でも、

島「アキ、木下がアキの事を彼氏って言うてるけど、どうゆう事？」

姫「明久君：どう言う事か話してもらいましょうか？」

『ゴゴゴゴゴ』

やだなあ二人が今は仁王像の実現みたいに感じるよ。

……えっ？なんで馬鹿なのに仁王像のことを知ってるかだつて？

はは、もう僕はそこまでバカじゃないよ。

須「吉井を殺せええええええ」

FFF「うをおおおおおおお」

FFF団まで：僕：生きて卒業できるかな：

？「うるさいぞお前らあ下校の時間のはずだぞお」

「にて、鉄人」

鉄「何故このほとんどの奴等が西村先生と呼べん」「何故ここに鉄人が!?」「馬鹿な職員室にいるはずじゃあ」「クソ、鉄人がいたら吉井を殺せないじゃないか」「その他諸々」ピキイ

あ、切れた

鉄「今文句行つた奴は補習だあああああああ」

FFF「「「「そんな不条理なああああああ」」」」

と言うことでFクラスのほとんどがいなくなった。やったねたえ

ちゃん

島「クウ、先生が見ているならアキを殺れないわね……坂本試召戦争よ」

雄「まで、まだはy「いいわよね」はい」

今美波から殺気と呼ぶには優しいほどの殺気を感じたよ

雄「と言うわけで、翔子、明日いいか？五対五でいいか？」

翔「こっちは断れない、それともう一つ」

雄「勝った方が言うことを一つ聞くって奴か？」

翔「そう」

島「覚えてなさいアキ」

僕なにかした!!

優「大丈夫明久君は私が守るよ。」

と言うわけで明日試召戦争だけど：僕生きているかな？」

A対F変わらない戦いの日々

次の日

島「さあ、アキを返してもらいましょか!!」

姫「明久君はFクラスじゃなきやダメなんです!!」

FFF「異端者には死の報復をおおおおお」

『『報復をおお』』

おおおおおおおおおおおおおお

雄「明久、不幸になろうぜ」

康「人の幸せは許さない」

秀「……………いや、セリフを置かれても明久への恨みなんてないのじゃが」

秀吉のやつどうしたのかな?

優「やつと来たわね、完膚無きまでに叩きのめしてあげるわ」

島「どうせP……の癖に」

優「なによ、あんたなんかP……のP……じゃない」

姫「ちよつと待つて下さい、美波ちゃんはP……でP……なんかじゃありません。」

優「そういう姫路さんなんて…」

これがかかなり続きますので動画サイトのおきを使わせていただきます。

『キングクリムゾン』

島、姫、優「ニハアハアハア」

島「こうなったら、戦争で決着よ」

優「望むところよ」

最初からそうして下さい

高「そろそろいいですか?」

雄、翔「はい(ああ)」

高「それでは一番手前へ」

島「うちがいくわ」

優「あら？奇遇ね、私も一番手なの」
島「なによ、あんたなんか…」

『キングダムソング』

高「そろそろイイですか？」

島、優「ハアハア、はい!!」

高「教科は何にしますか？」

島「数学でお願いします。」

優「いいわよ」

「サモン」

【数学】

島田 美波 376点

島「レベルアップしたうちの数学の力見せてあげるわ」

優「確かにすごいけど、ここはAクラスなのよ」

木下 優子 397点

優「それぐらいが当たり前よ」

島「ーっ、歴戦の力見せてあげるわ」

優「無駄よ。」

ガキン、バシ、ドガアン

島田 美波 0点

木下 優子 40点

優「ちよつと危なかったわね」

高「勝者、Aクラス」

うおおおお

愛「やったね優子」

翔「…優子…よくやった」

明「すごかったね、さすが優子だ」

なでなで

優「…／／／」

愛「優子…勝てたのって愛の力？」

優「な、なにいつてるのよ」

翔「：愛の力は強大」

雄「俺を見て言うな、翔子」

島「アキ、ちよつとなにしてるの？」

姫「明久君、優子ちゃんのを頭をなんで撫でてるんですか？」

FFF『『吉井を殺せ』』

優「私の幸せのひと時を邪魔しないで!!」『キツ』

その睨みつけはライオンさえもビビるような睨みつきだった

高「では、二番手前へ」

秀「わしが行こうかの」

久「ここは僕が行こう」

雄「なっ!!もう久保を出すのか」

高「教科は何にしますか？」

秀「古典なのじゃ」

「サモン」

【古典】

木下 秀吉

2 1 4 点

優「あら、頑張ったじゃない」

明「でも相手が久保君だからね…」

久保 利光

4 2 1 点

明、優「やっぱり…」

秀「くっ、でも戦うのじゃ」

久「望むところだよ」

『キンクリ』

木下 秀吉

0 点

久保 利光

1 2 6 点

久「ここまで削られたのは久しぶりだったよ」

秀「くっ、負けたのじゃ」

雄「後がねえか、ムツツリーニ」

康「：任せろ」

愛「じゃあ僕だね」

康「：望むところ」

「サモン」

A対F変わらない戦い2

愛「さあ行くよ、ムツツリーニ君」

康「…来い!!」

「サモン」

【保健体育】

工藤 愛子

829点

F&A 「「なあ!!!!!!!!!!」」

「800点越えだ」と「そんな…学年主席の2倍くらいじゃないか」「ありえない」

愛「どお、他の教科は少しお粗末だったけど、流石のムツツリーニ君でも、ここまでではとれないでしょ」

明「愛子さん、ムツツリーニを舐めない方がいいよ」

愛「えっ?…」

康「……………ふっ……………まだその程度か」

土屋 康太

989点

「……………!!!!!!!!!!」

大「土屋、俺はもうお前に追いつけないのか…」↑大島先生 8
76点

島「あれ?大島先生、いつからここに?」

雄「ああ、工藤愛子が召喚したあたりからだ」

大「くっ……………(泣)」

あ、泣いてる…そんなに悔しかったのか…」

愛「そ、そんな…こんな点数…」

明「愛子さん、気をつけて!!くるよ!!」

康「…加速」

愛「はっ」

『ギシヤァン』愛「くっ、」↑423点

康「まだまだ…加速」

0点

土屋 康太

979点(加速の複数作用による減点)

高「勝者Fクラス」

「うをおおおおおおおおおお」

雄「よくやったムツツリーニ」

秀「さすがじゃのう」

康「：動作もない」

愛「(泣) ゝめん…みんな…また負けちゃった…」

翔「：でも、愛子は頑張った」

愛「でも…負けたら…意味が…」

明「そんな事はないと思うよ。」

愛「…明久、…君…」

明「少なくとも、愛子さんの点は上がってるじゃないか、合宿の時と比べたら点差だって縮んでる…つまり、その努力は報われている途中なんだよ。だからさ、もっと頑張って追いつこう、ムツツリーニに…そして、最後には、みんな勝って笑おうよ」

愛「あき…ひさ…くん…」

明「今回は負けちゃったけど…頑張ったね愛子さん。」

愛「あき…明久く…くん」『だき』

明「うわ、愛子さん…ちよつ、抱きつかないでよ」

優『ジーーーーー』

明「優子、目が怖いよ…怒ってる?」

優「まあ、愛子だったらいいわすこしぐらいわね…でも!! 一番は私よ!!」

明「ありがとう…優子…」

島「アキ、ちよつとなにしてるの?」

姫「明久君…優子ちゃんばかりではなく愛子ちゃんまでも…許しま

せん。」

FFF「吉井……………殺す……………」

優「はいはい、感動のシーンだから邪魔しないの」

愛「ねえ明久君…」

明「なに？愛子さん？」

愛「これからはさん付けしないで愛子って読んでよ」

明「ええ!!……………分かったよ愛子…じゃあ僕も明久でいいよ」

愛「明久…ううん、アツキーって読んでいい？」

明「それでいいよ」

愛「ねえアツキー、これからも一緒にいてくれる？」

明「うん」

愛「一緒に勉強してくれる？」

明「うん、頑張ろうね」

愛「もし…もしまた負けちゃたら、また…こうやって慰めてくれる？」

明「うん、そしたらまた一緒に勉強しよう、愛子がいくら負けちゃっても僕は愛子を何度でも慰めてあげるよ。そして勝てたら、一緒に喜ぼう」

愛「うん…ありがとう…アツキー(ニコ)」

明「……………」

やばい、すごい可愛いよ、愛子ちゃん…

優「明久…君…」

明「ゆ、優子!!どうしたの？」

優「なんか、浮気オーラを感じたわ」

浮気オーラって…

愛(ありがとう…明久!!)

高「でわ、次の方」

翔「…私が行く」

明「あれ？僕じゃなくていいの？」

翔「…明久に閉めてもらいたい」

明「……………分かったよ、翔子さんも頑張ってね」

翔「：翔子でいい」

明「へっ？」

翔「：優子も愛子も呼び捨て：だから私も呼び捨てでいい」

明「：わかった、頑張ってる翔子」

優「代表、頑張ってる」

愛「僕に分まで」

久「君なら勝てるさ」

A「二代表、ファイトルp (^ | ^) q」

雄「じゃあFクラスからは俺が出るか」

秀「頑張るのじゃぞ」

康「：信じてるぞ」

島「負けたら承知しないからね」

F「二頼むぞ、坂本!!!!!!」

高「まだ、一試合残ってますけど代表同士でいいんですね。」

翔&雄「はい(ああ)」

高「では始めて下さい」

「サモン」

雄「あああ、ハアハアハアハア…俺は一体なにを…」

高「で、ではそろそろいいですか？」

A & F『すいません』

雄「いくぞ!!翔子!!」

翔「きて…雄二…」

「といい、二体の召喚獣は互いの武器を交えた

雄「変化!!棒からメリケンサックに変化!!」

雄「さらに腕輪発動!!右腕を巨大化!!」

といったら雄二の召喚獣の右腕が巨大化した(ONE P.O.C.E
のル○イさんのギア3だと思ってください、しかし腕自体ではなく腕
の周りのオーラの的なのがでかくなります)

雄「いくぜ!!」「ドガああん」

霧島 翔子 182点

A「一発で200点以上も削るなんて…」

坂本 雄二 356点

A「だけど、100近くも消費してるぞ」

F「よし、いけ坂本」「お前ならいけるぞ」「もう少しだぞ」

A「代表、頑張れろ」「翔子さん、巻き返せろ」「どうしてそこで諦
めるんだよ!もうt「それはやめとこうよ」ネバーギブアップ!!」「そ
こだけ言つとけば良かったじゃない」

翔「…今度はこつちから…」

といったら召喚獣は太刀を横に2回ふる、それを雄二の召喚獣が
バックジャンプでかわした時

翔「…腕輪発動!!」

といったら召喚獣の太刀にオーラの的なのが纏う

翔「…斬波」

といったら斬撃の塊が飛んだ(BL.O.A.C.Hのイ○ゴの月○天昇に
似たのだと思ってください)

雄「ぐっ」

坂本 雄二 242点

A「おお、代表も100点以上削っているぞ」「さすがね」

霧島 翔子 132点

F 「あんな技なのに50点しか…」 「やっぱり今回も…」

明 「よけて!!翔子!!」

雄 「遅い!!腕輪発動!!」

翔 「:くっ」

『ドガああん』

霧島 翔子 24点

A 「かすただけなのに:」 「こんなに削られた!!」

坂本 雄二 142点

F 「いけるぞ坂本!!」 「今度こそだあ」

翔 「ありがとう:明久:…」

明 「まだだよ翔子」

雄 「明久!よく読んだなお前」

明 「長年の悪友だからね。」

雄 「ヘッ、じゃあこっちに來てもらわないとな」

明 「なら:勝ってみろよ!!翔子に:俺たちAクラスのメンバーに

!!」

雄 「言われなくても、そのつもりだ!!」

翔 「:余所見は禁物」

雄 「な!!」

『ズガアアン』

坂本 雄二 84点

雄 「まさかこの点数で打ってくるとはな」

霧島 翔子 4点

A 「:翔子(代表)(霧島さん)」

翔 「:いい、次で決める」

雄 「それはこっちのセリフだぜ:…いくぞ!!」 『ダッ』

翔 「:腕輪:発動:…」

A & F 「:なあ!!!!!!!!!!」

雄 「チイツ、相打ち覚悟か:」

翔 「これで:決める:」

『ズバア』

霧島 翔子

0点

雄「くそつたれ、これじゃあ倒せねえじゃねえかよ」

翔「私がダメでも、明久が勝ってくれる…」

雄「ずいぶんと明久の事を信頼してるんだな」

翔「春休みだけで私まで追いついた…それだけで信頼できる…」

雄「ずいぶんと安い信頼だな」

翔「それだけじゃない…他にも…口では表しきれないほど…」

雄「なるほど…じゃあな……………」

坂本 雄二

1点

雄「その信頼を、見せてもらおうじゃねえか!!!!!!!!!!!!!!姫路との戦いでな!!!!!!!!!!!!!!」

明「……………上等だ…やってやろうじゃねえか」

変わりある戦い A対F 決着

高「では最後の人前へ」

姫「はい」

F「姫路さん頑張つてー」「吉井なんか倒してしまえ」「ぶつ殺せー」

明「はい」

A「吉井くん頑張つてー」「これで決めてくれー」「負けるなよー」

姫「さあ、明久君！元いたクラス…いや、いるべきクラスに帰つてきてもらいます」

明「なら問題ないね。ここがいるべきクラスだから。」

高「教科はなににしますか？」

明「姫路さん、決めていいよ」

姫「歴史じゃなくていいんですか？」

明「それじゃあ僕の進化を見てもらえないじゃないか」

姫「いいですよ、総合でお願いします。」

『『サモン』』

【総合科目】

姫路 瑞樹

4857点

A「…何だつて！！！！！！！！」

翔「また上がつてる…」

愛「学年首席レベルじゃないか」

久「また点数をあげたんだね。」

優「確かに代表を抜いたら勝てそうにないわね」

優「…でも、今の首席と次席を舐めない方がいいわよ」

雄「次席？次席つて久保だろ」

愛「みんなの認識わね…でも本当は…」

吉井 明久

5345点

愛「明久君が次席なんだ」

F「二なにいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい」

久「やれやれ、この点数は流石に取れないや」

優「私もできるのは知ってたけどまさかここまでとはね」

愛「アツキーもすっごいな〜♪」

雄「あの馬鹿が…次席…だと…」

翔「雄二わかった？この努力こそが信頼の形、明久はもうAクラスのリーダー格…いやリーダーなんだよ」

雄「なんでリーダーなんだよ、お前が首席だろ？」

翔「明久は私にはできないことがたくさんできる…」

雄「それはなんだよ」

翔「もし…教科に行動力や度胸、実戦があつたら確実に首席…いや学校の首席になることができる人だから」

明「いくよ姫路さん」

姫「むむむ、明久君がこんな点数を取れるわけがありません。カンニングをしたんです許せません成敗します。」

明「きみがこの点数をどう思うかは知らないけどさ…僕にも譲れないものと渡せないものがあるんだ!!」

姫「そんなの知りません、これじゃあなんで私は…私は…明久君がFクラスにいると思っただから…ワザと…」

姫「明久君はFクラスの人々を見捨てて何が欲しいっていうんですか!？」

明「見捨てたつもりは毛頭無い…でも、前に進まなきゃいけない事だつてあるんだ!!」

姫「御託はもういいです、行きます」

明「僕とAクラスの人々のために…いくよ」

キーン

姫「腕輪発動、熱線」 4757点

ギユウイーン

明「ぐっ熱い」 5021点

姫「まだまだです。」

ズバツズバ

明「グアア」4924点

明「押されてるなら出し惜しみは不要だね」

明「腕輪発動、虹色装備」2424点

雄「馬鹿な2500点も下げて使う腕輪があるのか？」

明「『赤』 火炎」

姫「!!?!」

明「炎の拳」(ポケ○ンのファイヤーパンチだっけ?みたいな感じ)バギ

姫「えっ?!」4298

雄「馬鹿な500点も削ったぞ」

優「あれが明久君の腕輪虹色装備よ」

雄「虹色装備だと…」

優「そう、能力は色によって体から発する、または作れる、纏えるものが違うんだってさ」

愛「初期の減りの量は多いけどそのあとは入れ替え自由なんだってさ」

雄「明久が今使ってるのは…」

久「おそらく赤の火炎だろうね」

明「『十字火』」

ブオオ

姫「きやあ」3689点

姫「負けれません、熱線」

明「『炎の壁』」

バアン

姫「!!効いていない、壁で守られている!!」

明「今だ、『神火不知火』」

姫「こんなもの」

スパッスパ

明「気づいてる姫路さん、あなたの召喚獣の周りにホタルがたくさんいるの」

姫「これは…まさか、全部火!!」

明「正解『萤火　火達磨』

ボウン

姫「きゃあああ」2976点

姫「ま、まだです」

明「もう諦めたら、姫路さん」

姫「まだ：行きます」

ダツ

明「仕方ない：とどめだ『大炎戒　炎帝』

姫「な、何ですかそれは：」

明「さあいくよ」

ブン

ドガアアアアアアアアアン

姫「あ、ああ………」0点

高「勝者Aクラス、総合結果で3対2で勝者Aクラス」

『『『『うおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおお』』』』

こうして始まった僕らの最後の高校生活

明久召喚獣紹介

明久の召喚獣

黒服に包まれていてマントのようなものを羽織っている
腰に刀4本背中に2本、足に拳銃を1丁ずつ腰の裏に短刀が1本装
備しています。

【明久の腕輪【虹色装備】】

色によって使える属性(?)が変わる能力

消費点数は総合科目で2500点単科目で250点です。

まずはベースの12色

赤色・火・炎／エ○スのメラ○ラの実と似たような感じです。

しかし体自体を火・炎にする事は出来ない(この文はすべてに当て
はまりますので以下も省略します)

青色・水／これも能力者と同じような感じです。水温は―20度か
ら100度まで調整することが出来ます

黄色・光／これは他のとは違いたんに速さが上がるだけだが、上
り方は尋常じゃない

緑色・草・木／その辺にある草や木を利用することができる。いっ
ちやえばNAROTOの木遁だ

黄緑色・葉／これは緑色とは少し違い葉に切れ味をのせて操るもの
である

水色・氷／青○のヒエヒエの実だとおもってください

紫色・毒／体の中を蝕む毒から外見自体を溶かす毒まで多様な毒が
ある

オレンジ・爆炎／爆発や爆炎を出せる

*炎と爆炎の違い

炎は継続的な力で爆炎は一瞬の力だがその一瞬は炎の三倍以上だ
と考える

灰色・風／風の軌道、風力、速さを自由に操れる

茶色・土・砂・地面／土などを自由に操り、ものを作ることができ

る、またそのものは動かすことも可能

黒色・闇／ただ純粋に力が上がるだけだが破壊に関係のあるもの
だったら大体は作れる

例) ブラックホール

白色・純白／黒とはついとなるがこれも純粋に力が上がるだけだが
守護系のものなら大体は作れる

例) 精霊

色であつたらなんでもよしとしますが大体はこの12色だと思
います

ミックス

ベースの12色のうち二つ以上の色を混ぜて使うものです

例)

黄色＋黒色＝雷 (ゴロ○口の実と同じです)

赤色＋黒色＝黒炎 (黒い炎、破壊力がましている)

などと混ぜて使うことができる

ギア

使うかどうかで迷ったんですが字振りのために一応書いときます。
もしかしたらこの先の話のネタバレになるかもしれません。

ネタバレが嫌いな人とこの作品を先読みしたくないと思う人は
戻ってください。

ほとんどの人が残ると思いますがまあよろしくお願いします。

効果時間15分→永久←

ギア2

一色しか使えなくなるが威力が元々の二倍となる

ギア3

部分的に巨大化させる

ギア4

巨大化しているところを一カ所(その部位)に集める

ギア5

これは虹色状態、つまりすべての色を一気に使える

効果時間5分〜10分←

ギア0

これはギア2とギア5の合体したものですべての色が使えてその威力は元々の二倍となる

パーフェクトモード

このモードはギアをすべてもう一段階あげた状態である

効果時間3分〜5分

ギア2パーフェクトモード

その色の属性がキックボクサーのように頭、腕、脛、足にプロテクター的なのが装備できる

ギア3パーフェクトモード

巨大化している状態で好きな形に変形することができる

ギア4パーフェクトモード

色の属性を衝撃波などとして飛ばすことが可能となる

ギア5パーフェクトモード

すべての色の属性を3つまで同時に扱うことができる

効果時間1分〜3分

ギア1

ギア0の強化版、すべてのギア、パーフェクトモードが使えてその威力は元々の五倍となる

バツゲーム

明久「さあみんな、どんな罰がいいかな？」

雄二「さて明久、俺たちは負けた相手の言うことを聞くだけだ、俺はお前の言うことは聞かねえぞ」

愛子「なにいつてんのさ、これは代表戦だよ。全員が参加しているわけじゃないんだし代表戦を勝った僕達がFクラス全員に命令できるはずだよ」

優子「そうね、理屈でそうなるんだから全員に命令使用かしら」

雄二「んな、じゃあ俺と康太も受けるのかよ」

康太「理不尽な…」ギリ

久保「少し屁理屈かもしれないけどね」

翔子「雄二、前持つて言わないからこうなる…雄二は焦りすぎていた。明久がいらないから」

明久「へえ？僕がいらないから焦ったの？雄二が？」

翔子「…そのままじゃあ今年の試験召喚戦争は怖くも何ともない」

雄二「グツ」

島田「アキ!! あんた何カンニングしてんのよ」

明久「ちよつとカンニングなんかしてないって言ったでしょ」

島田「嘘よ!! 先生が見逃しただけよ、あんたが瑞稀の上な訳がないじゃない」

明久「んな理不尽な!!」

島田「問答無用よ! 死になさい」

優子「まだ、バツゲームが終わってないわよね」

島田「ちよつと…何で右手をつかんでるのよ……」

優子「あら、明久君に向かって振り上げたからよ…」

島田「だつてうちはアキを殴るたm『ぎゅううう』いたいたいたいたいたいたいたいおれるからあ」

優子「だつて折ろうとしてるもの」

明久「優子、そこまでにしときなよ」

優子「でもこいつは」

島田（アキ……やっぱりアキはうちを「罰ゲームに進めないじゃないか」微塵も思ってたねええええええ」

優子「それもそうね」

パッ

雄二「で？俺らはどうされるんだ？」

優子「ちよっと待ってなさい」

く会議中く

久保「明久君に二度とかかわらないと言うのはどうかな？」

愛子「でも明久のこれまでの苦しみはどうするの？」

翔子「…それに木下は、ほとんど関係ない」

優子「困ったわね」

明久「僕にいいアイデアがあるんだ」

優子「本当？」

明久「うん、秀吉には危害が無く僕にしてきたことをそれ相應の報いを受ける方法が」

久保「そんないい手があるのかい？」

明久「うん、あのね……」

く教室く

優子「罰ゲームが決まったわ」

雄二「んで、俺たちはどんなめにあうんだ」

姫路「お手柔らかにお願いします」

愛子「じゃあ明久君に発表してもらおう」

明久「君たちが受ける罰ゲームは……ズバリ」

明久ドン「今まで君たちがしてきた僕に対しての暴力を君たちにも味わってもらおう」

F「「なっ、なにいいいいいいいいいいいいいい」」

秀吉「つまり……どういことなのじゃ」

明久「僕に行った暴力、また行おうとした暴力を君たち受けてもらおうってこの」

秀吉「つまり……みんなで火あぶりとかにされるってことかろう」ガクガク

明久「大丈夫、自分が使用としたことにするから」

FFF団団員「俺は須川の命令に従って動いただけだしほとんど遠くから見ていただけだから大丈夫だな」

団員「須川の命令に従ってただけだしな」

団員「俺たちは無罪か」

須川「お前ら、俺を売る気か」

団員全員「自分が助かるなら」

須川「裏切りもんがあああああああああああ」

明久「あ、FFF団は一括りにするから」

FFF「なぜだああああああああああああ」

秀吉「わしは…何かしたかのう」

明久「へえ？秀吉はもう終えてるじゃないか」

秀吉「??」

明久「いくら僕の彼女の妹でも」

秀吉「わしは弟じゃ」

明久「差別つていけないと思うんだよ、それがたとえか弱い親友の

女の子だとしても…」

秀吉「だからわしは男じゃ」

明久「でさあ、秀吉つてさ僕に女装させたことあるじゃん」

秀吉「確かにそんなことがあったのう」

明久「だからさあ秀吉にもしてもらおうと思うんだけどさあ」

秀吉「演劇の時によく女装してるからのう」

明久「女装？女子に女装させても意味ないじゃん、だからさ秀吉には男装をして「わしは男じゃ」と言っておろうがあああああああああ」

明久「さて、他のみんなは…」

雄二「俺は見るだけのはずだったが？」

明久「雄二だけ何もなかったのはあれだから、女子を使っていじめたということにしといたから」

雄二「待て明久、今まで俺が悪かった、これからは何もしねえ、そればかりかお前の味方になるからそれだけは」

明久「雄二のことは翔子さん任せだから」
雄二「それだけわああああああああああ」

翔子「今日は少し怒ってるから：ヤンデレプレイでいく」
雄二「やめろおおおおおお翔子おおおお」

明久「他は紐なしバンジーだろ」

「「ひええええええ」」

明久「火あぶり串刺し e t c」

「「ぎやああああああああああああ」」

明久「あ、一つわすれてた」

「「？」」

明久「船越先生（40）の逆ハーレム」

「「それ だ け は あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ」」

ああああああああああああああああああああああああああああああ

全員が見事に成し遂げた。死者は0人らしいほとんど全員が「死んだと思った」「死んだ気分だ」と言っているが、バカは治っていないからそこまでしにかけてもなかったんじゃないかな？ b y とある生徒

明久「あ、二人には髪を切られそうになったんだよね」

姫路「何のことですか？」

明久「あの時は怖かったな」

島田「あんた何言ってるの？」

明久「やろうとしたことは受けるんだよね」

ガシ

島田は優子が抑えている

島田「ちよつとあんた何してるのよ」

優子「罰ゲームよ」

姫路を美穂（佐藤美穂、原作では初の A 対 F の試合で明久と対戦しています）が抑えている

姫路「何ですかこれは？」

美穂「ごめんね罰ゲームだから」

明久「じゃあ愛子さん、よろしくね」

愛子「まかせなさい」

といい片手に握られている物はバリカン

姫路&島田「いやああああああああああああああああああ

あ」

Fクラスには男子生徒が全員死んだ目をしていた、代表はもはやし
んでいるのと大差は無かったらしい

この日季節外れのニット帽をかぶってカツラを買った女子高校生
が2名いたらしい

この日Fクラスは性別秀吉を抜いた全員が死んだ魚のような目を
していた

清涼祭

清涼祭ダイジエスト

三年生でも清涼祭はやっている

今回は清涼祭を簡単にまとめてあつた事を説明しよう

まずはトーナメント戦、優勝商品は如月フレンドパークのチケツトだった。

これには僕はあるのがめんど臭かったけど優子と愛子にさそわれてしまったが、Aクラス次席の頭脳に資格はない

「二人で出たら？」

と、行きたい人同士にいかせてなお僕は出ないと言う作戦を瞬時に作ったのさ。でもその時優子と愛子の顔が少し怖かったような…

結局はこの二人が優勝、二人で行くのかな？

この間に僕は店の手伝いをしていた。

その時に卒業した？城さんと小暮さんがきてくれた。

少し前に学園全体を巻き込んで3年生対2年生の試験召喚戦争をやった時には敵同士でいがみ合ったりしていたが、春休み僕の学力が飛躍的に上がったのは五割型？城さんのおかげである。

何たって図書館でばったりあった時に勉強しているところを見られて一時は引かれたけど理由を言ったら効率のいい勉強方法を教えてくれたのだ。

それからはあまりあつてなかったけど、今日？城さんに

「吉井君はAクラスには入れたんですね。元々素質はあつたんですし貴方にピツタリの勉強方法を教えたのでCクラスに入って当然、Bクラスでよく出来た程度だと思っていましたけど、貴方は私の予想をはるかに超える努力をしたんですね。」

と、褒めてもらったのである。？城さんと小暮さんは東京の方の名門校に行っているらしいそこでも学年上位だというから驚きである。そして二人はお茶を飲んだら帰って行った。

P・S・ハゲとモヒカンは二流の大学に通っているらしい、？城さ

ん曰くもう少し上の大学にいけるはずだったんだが
「そこまで勉強したくねえ」「あまり上の大学にいくと自分たちが下になるから嫌だ」

などと言っていたらしい。

このあとに起こった休憩時間に起こった出来事は一言では表せれないから、見ていただきたい。

――――
明久「やつと休憩だ〜」

優子「明久君、一緒に回らない？」

明久「うん、いいよ」

愛子「あ、あの…」

優子「?どうしたの愛子？」

愛子「僕も一緒に回りたいな…:…なんて」

明久「いいんじゃないかな？」

優子「!!!明久君!!!」

明久「どどど、どうしたの優子？」

優子「せつかくのデートだったのに…」

明久「なに?どうしたの？」

優子「何でもないわよ!」

明久「なぜ怒っている？」

愛子「えつと…:…ありがとね」

――――
2 | C射的場

パン

コト

愛子「明久君うまーい」

明久「ちよつと愛子☒」

優子「!!愛子!近づきすぎよ」

明久「優子も引つ張らないで」

モブ (あの人たちちつて3 | Aの人だろ)

モブ（確か、全科目万能の木下先輩、保体学校2位の工藤先輩、学校一のバカからAクラスの次席になった歴史上立った一人の観察処分者、下克上の吉井先輩だとおもうよ）

モブ（そんな人たちがこんなところでいちやつくなんて…）

モブ（見た目じゃ判断できないってことよ）

明久「次の店行こうか」

愛子「僕お腹空いたな」

優子「そういえば、そろそろお昼時ね」

明久「じゃあ昼食にしようか」

優子&愛子「うん」

――――

3 | Bイタリアン料理店

小山「あら、Aクラスの人がこんなところに何のよう?」

優子「うるさいわね、昼食よ」

愛子「優子落ち着いてよ」

明久「ただここに食べにきただけだよ、美味しそうな匂いもしたしね」

小山「まあいいわ、お昼過ぎだからまだ少し混んでるけど、どんな席がいいかしら?」

優子「どこでもいいわよ」

小山「じゃあ個室ね」

優子「ちよつと、全員入れないじゃないの」

小山「嘘よ、4人席でいいかしら?」

明久「うん、大丈夫だよ」

小山「それじゃあこつちよ」

――――

小山「注文が決まったら読んで頂戴」

優子「私はラザニア」

愛子「僕はマカロニで」

明久「スパゲティで」

小山「ずいぶんと早いわね。まあいいわ、少し待ってなさい」

――

小山「またせたわね」

明久「そこまで待ってないよ」

愛子「むしろ早いぐらいじゃないかな？」

小山「褒め言葉として受け取っとくわ」

優子「いい匂いね」

小山「Aクラスほどじゃないけどお金をかけているもの」

コトツ×3

小山「それじゃあごゆっくり」

明久&優子&愛子「「いただきます」」

明久「ん、美味しい」

優子「本当ね」

愛子「絶品だね」

.....

優子「明久君のスパゲティ、美味しそうね、一口いいかしら？」

明久「別にいいよ」

優子「ん、」

明久「..... どうして口を開けてるのかな？」

優子「食べさせて」

明久「..... いいよ、はいアーン」

優子「:／／あ、アーン」パク

明久「どう？美味しい？」

優子「ええ、美味しいわ」／／

愛子「..... 明久君、その... 僕もいいかな？」

明久「スパゲティのこと？いいよ」

愛子「できれば... 私にも... あ、アーンで... 食べさせて... 欲しいかな」

……」／／／

明久&優子「!!!!」

優子「ちよつと!愛子!明久君は私の彼氏よ」

愛子「目の前でやられるこっちの身にもなってよ……羨ましいじゃ
ん」

なるほど、愛子も我慢の限界だったってことか。最後の方は聞こえ
なかったけど

優子「明久君は渡さないわよ」

なぜそうなる!!

愛子「あ、あきひさくん…ぼ、ぼくにも…その…アーンしてくれる
かな?」／／／

ここでいいえと答えれば命が救われるが、僕の心には一生の傷が残
るだろう

明久「は、はいアーン」

優子「あ、あきひさくん?」

愛子「ん、」パク

愛子「ん、美味しい」

優子「浮気かしら?明久君」

明久「い、いいじゃないか少しくらい」

優子「はあ、まあいいわ、愛子と一緒にきている時点でもうアウト
だったし」

何のことだろうか?

優子「そうだ、お返ししなきゃね。はい明久君」

愛子「わ、わたしもはい」

これは……修羅場と言うやつですか…だれか…助けて…

優子&愛子「はい、アーン」

—————

こんなことが続き清流祭は終わった。

この振り替え休日、如月フレンドパークに二人から誘われて、3人
で行くこととなった。しかしそこでも修羅場とかしていた

合宿と壊れる輪 特例のAクラス

〈朝会〉

鉄人「本来なら2年生だけなのだが、お前等の学年にはバカが多すぎるため」

Fモブ「誰だよそのバカ」「ふざけんなよ俺等も巻き添いかよ」「全く失礼な奴らだな」

鉄人「お前等だFクラス」

F「「な、何だつてええええええ」」

愛子「相変わらずだねFクラスは」

明久「そうだね、愛子」

愛子「でもさ、去年までアツキーは彼処のビリだったんだよね」

明久「黒歴史です」

愛子「でもそこから学年を飛ばして学園の2位なんだからすごいよアツキー」

明久「うん、ありがとう愛子、でもさ…何で腕組んでるの?」

愛子「いいじゃん別に、僕とアツキーの間柄なんだからさ」／／／

明久「いや…優子の目線がすごいんだよ」

優子 (・) (・)

ジーーーーー

愛子「す、すごいね…」

鉄人「だから、特別に合宿を開くことになった」

愛子「?何の話?」

明久「聞いてなかったの?」

愛子「すみません…」シユン

明久「ようはバカが多いから2年の時にやった合宿を開くことになったってことだよ」

愛子「なるほど、よくわかったよ」

優子「話を聞かなくなるほど明久を見てたってことかしら?」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

明久「ゆ、優子!!いつからそこに!!」

優子「今さつきよ、朝会も終わったし、愛子少し話さない」

愛子「助けてアツキー」

明久「ごめん愛子、ここは助k「次は明久だからね」愛子、ここは

一緒に助け合いながら逃げよう」

愛子「うん」

『ダッ』

優子「あ、まちなさーい」

翔子「…みんな元気…とてもいいこと」

合宿当日

明久「フェー大つきいバスだな」

優子「そうね、去年のよりも大つきいわ」

愛子「流石にびつくりだね」

翔子「…大きい」

明久「でも来るの早過ぎたね」

愛子「バスの中で待つてようよ」

優子「そうね、ここで待つても意味ないものね」

翔子「…開いてる」

明久「もう誰かきてるのかな？」

といい顔をバスの中にいれてよくみると

久保「やあ、随分と早いなだね明久君」

明久「く、久保君!随分と早いのはそつちだよ」

久保「僕もさつき来たばかりさ」

優子「え、久保君いるの?」

愛子「本当だ、早いなだね久保君」

翔子「…私たちもだけど早すぎる」

久保「はは、今年はすごく楽しみだからね」

明久「僕もだよ」

優子「いいえ、去年は私たち勉強のことしか考えてなかったから、今

年はみんなさらに楽しみにしているはずよ」

明久「何で？」

愛子「アツキーのおかげだよ」

明久「僕なにもしてないよ」

翔子「明久はみんなに教えてくれた」

明久「そ、そんな、僕が教わってばかりなのに」

翔子「勉強じゃない」

愛子「アツキーは僕たちに遊び心を教えてくれたんだよ」

明久「遊び心？」

優子「そうよ」

久保「僕たちは去年まで勉強さえできればいいと考える人たちばかりだったんだ。

でも、明久が次席になってみんなと接して、笑わしてくれて、勉強ばかりだった僕たちは心から笑ったのは久しぶりだったんだ。

そしてわからしてくれた、生徒に一番大切なのは勉強なんかじゃない、みんなと楽しい思い出を作ること、心から笑いあうこと、楽しむことを僕たちに思い出させてくれたのは明久君、君なんだ」

明久「なんか…照れるな…」

久保「Aクラスを代表するというよ、ありがとう明久君」

翔子「私からも、ありがとう」

愛子「アツキーありがとね」

優子「明久、みんなが笑っていられるのはあなたのおかげ、だから…あなたは私たちを頼っていいのよ。恩返しされたと思うぐらいの気分だね」

明久「うん…どういたしまして」

Aモブ「あれ？吉井も早いな、実は俺もお前といくのが楽しみだよ」

「吉井、お前の馬鹿騒ぎ楽しみにしてるぜ」

「吉井君、みんなも随分早いね、こんなに楽しみだったのは私だけじゃないんだ」

「うをお、何でこんなにいるんだ？みんな時間10分に来てなかったか？」

「それだけ楽しみつつてことではよみんながさ」

ワイワイガヤガヤ

く出発45分前く

高橋「ふう早く来過ぎてしまいました。みんなはまだ来てないでしょう…でもなんでこんな早くきてしまったのでしょうか？」

「お、高橋先生じゃね」「本当だ」「おーい高橋せんせーい」「高橋せんせーいみんな揃ってますよ」「先生で最後ですよー」

高橋「みなさん…こんなに早く来ているなんて…吉井君のおかげですかねこんなにも明るいAクラスなのは」

「せんせー早く行きましょう」「ビリですよー」「先生急いでー」

高橋「今行きます」

こうして今まで明るさが少ないと言われて来たAクラスは一人の観察処分者によって一番明るいクラスとなった

くバス内く

高橋「みなさん準備はいいですか？」

「「おおー」」

高橋「それでは」

『『しゅっぱー』』

運転手「あいよ、おっちゃんに任せておきな」(長年Aクラスのバスの運転手を務めて来たがここまで明るいAクラスは、初めてだな…あの少年がこの輪を作ったのか、素晴らしい子だ。

しかし、だからこそ万が一に彼を失った時はこの輪がひどく壊れることになる。

そんなことがなければいいがな…)

このバスは高橋先生を含めた全員が楽しそうにしていた。しかし、彼らは知らなかったこれから起こる悲劇を、そのAクラスはまるで翼をなくした鳥のようだった

突然の事態

〜とある電車〜

姫路「あれは出来ましたか？美波ちゃん」

島田「ええ、バッチリよ」

姫路「あれが成功すると、明久君が大怪我を追うかもしれませんが」

島田「アキならいけるでしょう」

姫路「Aクラスのみんないなくなれば」

島田「私達だけを見るはずだよ」

姫路「あの人たちもお別れですね」

島田「まあ、人のものを奪う泥棒猫を駆除しただけよ」

姫路「そうですね。成功すると思いますね」

島田「成功するに決まってるわ、瑞樹が考えた作戦なんですもの」

姫路「うふふふふふふふふふ」

島田「あははははははははははは」

雄二「なにを話してるんだ：あいつ等」

〜バス内〜

運転手（ツチ、今日はブレーキの様子がおかしいな：何事もないように気をつけねばな）

運転手「さあ高速に入るから気をつけてね。」

『は〜〜〜〜〜』

数分後

事件はここから始まった：

運転手（おっと、ここは急カーブだ）

ギョルルルルルルルルル

運転手「なあ!!」

急カーブしようとしたバスはブレーキが滑り高速のままスリップ状態である

「なっなんだ」「ウエぐるぐる回ってるぞ」「どうなってんだ!」

高橋「運転手さん、どうしたんですか？」

運転手「バスのタイヤがスリップしています。生徒を座らせた後先生も座ってください」

高橋「わ、わかりました。」

高橋「皆さん落ち着いて座ってください」

「なんなんだよ」「おい、壁にぶつかるぞ」「この高速道路、地上から30mほど離れてるぞ」

運転手「危ない」

ギョルルルルルルルル

スリップしながらも壁を必死によけるが

運転手「くそ、拉致が空かない」

明久「先生、召喚許可を」

高橋「なにするんですか☒」

明久「説明している暇はありません!!早く!!召喚許可を!!」

高橋「…分かりました…承認します」

明久「サモン」

【総合科目】

吉井 明久

5724点

愛子「アツキー、何するつもり?」

優子「大人しく座りなさい」

久保「明久君!!危ないよ」

翔子「明久…早く…」

明久「…このままいても、壁にぶつかるだけだ…」

愛子「だったらどうするのさ!?!」

優子「私達じゃどうしようもできないわ」

明久「確かにみんなは出来ない」

久保「だったら早く」

翔子「明久…危ない…」

明久「でも…僕ならどうにか出来るんだ…」

「!!!!!!!!!!」

明久「このバスは…僕が止めて見せる!!」

「!!!!!!!!!!」

明久「いくよ」ダッ

愛子「待って明久君」

優子「無茶しちゃだめええ」

久保「明久君!!」

翔子「明久」

バリーイイイン

明久の召喚獣が窓を割り明久と共に外に出る

「お、おい吉井」「なにしてるんだよ」「俺たちも飛び降りれば」「危ないよ、バカ」

明久「フー」

く回想く

明久「学園長、用事とはなんですか？」

カヲル「あんた点数が上がって腕輪が使えなくなっただろ」

明久「ああ、学園長に渡した奴ですか」

カヲル「あれを今のあんたの点数でも使えるようにしたのさ」

明久「本当ですか!!」

カヲル「ああさね、ただし使えるのは一回だけさね、時と場所を選びな」

明久「ありがとうございます」

く回想終了く

明久「時と場所：それは今だ!!」

『ダブル』

吉井 明久

2862点×2

『虹色装備』

吉井 明久

362点×2

明久「茶色 土壁」

土の壁が出来上がる

明久「さらにミックス発動」

明久「それから白を混ぜ」

明久「属性・ゴム」

明久（でもこれを突き破ってくるだろう…その時は!!）

「な、なんだこれ」「ゴムだ、吉井が張ってくれたんだ」「助かるぞ」
ブチ

「「なに！！！！！！！！！！！！！！！！」」

「突き破るぞ」「気をつける！！」

ブチブチブチ

明久「フー」

明久『ギア2』

明久「色は『黒』属性は純粹なるパワーだ！！」
ブチン

「「ギャー！！！！」」「「ワァー！！！！！！！！！！」」

明久「うをおおおおおおお」

ガン

右側のタイヤを召喚獣の一体が止めて、もう一体が反対のタイヤ、
僕が真ん中を抑えている状態だ！！

愛子「アツキー！！」

優子「明久！！」

翔子「明久…」

久保「明久君…」

高橋「吉井君！！」

「「よ、吉井（君）！！！！！！！！！！！！！！！！」」

明久「うをおおおおおお」

明久「俺があみんなを助けるんだあああ」

運転手（なんて子だ！！この状況で一人で逃げることを考えず、むしろ助けることしか考えていない…しかもこの子は観察処分者、両方の召喚獣のダメージも来ているはずなのに…本人も止めようとするなんて…）

ボキバキ

明久「がああああああああああああ」

愛子「アツキー！！やめてよ」

優子「そうよ、このままじゃあ明久が」

翔子「観察処分者だから…召喚獣の分のダメージもあるはずなのに…」

久保「普通の3倍ものダメージってわけなんだね」

高橋「吉井君!!今すぐやめなさい」

「吉井、やめろよ」「今のうちに降りて少しでもバスを軽く…」「ダメだ!!レールにぶつかった衝撃で空かなくなつとる」

明久「があああグウウウウ」

明久『パーフェクトモード』

腕などに防具が着く

明久「うをおおおおお」

キキイイイイイイイ

「とっ…止まった…のか…」「と、止まったぞおお」「後少しで落ちるところだった」

優子愛子翔子久保「」「明久(君)」「」

「そうだ、吉井く」「お前のおかげで助かったぞー」

明久「……………」

「よ、吉井く?」「ど、どうしたんだよ」

明久「……………」グラツ

ズザザアアアアア

明久は後ろの坂に落ちていった

「明久!!」「アツキー!!」「…明久!!」「明久君!!」「よ、吉井!!」「吉井君!!」「吉井!!」「吉井!!」「お、おい吉井!!」

ダッ

高橋「み、皆さん」

運転手「先生も言っただけでください」

高橋「し、しかし…」

運転手「いきたそうですよ…あの子を助けに…」

高橋「学校への連絡が…」

運転手「私がしておきます。救急車と、西村先生を呼びましょう」

高橋「…ありがとうございます」ダッ

運転手「……………さてと、私は連絡を…」

運転手（なんなんだあの子は…みんなのために命を投げ捨てる覚悟を感じた…あんな子がこの世にいるなんて…神様でも仏様でもいい、彼を助けてくれるなら悪魔でも閻魔でもいい…）

『彼を助けて

あげてくれ』

く電車く

プルルルルルルプルルルルルルル

鉄人「はい、もしもし西村ですけど、あ〇〇さんですか、毎年どこもありがとうございます。で、どうしましたか…：はい…：ええ…：Aクラスのバスが!!…：なにい吉井が!!!!分かりました。今すぐ向かいます」

雄二「なんだ…明久のやつ何か起こしたのか?」

秀吉「明久がおらんと楽しさが欠けるのう」

康太「…：寂しい…」

姫路「美波ちゃん、今の電話…」

島田「ええ、間違いないわね」

「うふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ」

雄二（なんだ…あいつ等の不気味な笑みは…）

鉄人「あーゴホン先生は突如いかなければいけないところが出来た。私がいなくなるから福原先生の言うことを聞くように」

『は〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜』

雄二（用事ってなんだ…）

○○駅〜○○駅〜お出口は右側です

鉄人（吉井、無事でいろよ!!）

閑話

3—A組【明久先生】

明久「oh イエイエイエイエイエ」

生徒『ohイエイエイエイエイエ!!!!!!!!!!』

明久「いいね いいね ベイベ」

生徒『ベイベ』

生徒「楽しいけどさ…」

生徒「受験：間に合うかな？」プシユ

もうすぐ夏だぜ!!

新ファンタ

3年C組【清水先生】

清水「お姉様は………なので………だから………」

生徒『………』

清水「だからお姉様は素晴らしい」

生徒『………』

清水「ここテストに出しますわよ」

生徒『バツ』

生徒「先生の興味とか性壁とかさどうでも良くね」

生徒「やってランねー」プシユ

新学期だよ

新ファンタ グレープフルーツでた

3—D組【姫路先生】

姫路「1980の明久の本が二割引」

姫路「明久君の写真を一括払いで5%OFF」

姫路「今なら一周年記念で13%引かれて」

姫路「さて、いくら!!」

生徒「先生あの顔でストーカーかよ」

生徒「6割引きだったよ」38点

夏休みだよ

新フアンタ ピーチでた

3—F組【秀吉先生】

秀吉「次々、次の問題はくやまやま山下さん」

山下さん「3xです」

ちやっちやかちやっちやっかちやかちやかちや

ちやっちやっ

ちやちやちや

秀吉「違うのじゃ」キリ

生徒「先生キャラ作りに必死だな」

山下さん「でも…傷つくわ」

フアンタ スウイーピーでた

3—G組【康太先生】

康太「……………授業だ」

康太「この問題わかる奴いるか…いないか…」

女子「はい先生」

康太「胸を揺らすな」ブシャアアアア

女子「どうすりやいいのよ」

生徒「さらしでも巻いといたら」

スツキリさっぱりフアンタ

3—J組【翔子先生】

翔子「漢字テスト」

翔子「横田、これ読んで」

『性的相手』

横田「読めません」(読みたくありません!!)

翔子「あ・き・ひ・さ、よ」キャ

横田「そうなんですか…」

横田「明久先生…」プシュ
生徒「モテるよな明久先生」
フアンタ

春なのに
トロピカルフルーツでた

3—H組【愛子先生】

愛子「明久君が…」

明久「愛子!!!!!!!!!」

愛子「今更なによ」

明久「俺が悪かった」

愛子「バカ…寂しかった」

スツ

優子+その他大勢『この泥棒猫』

愛子「優子!!」(それにみんなまで)

生徒「先生方全員」

生徒「授業しろよ…」プシュ

夏はフアンタ

スモモでた

3—S組【久保先生】

ストーン、ストーン、ストーン、ス

久保「本当にそこでもいいのか？」

生徒「うっ…」ストーン

バン

久保「君が掃除当番だ」

生徒「ラスト一つの穴だったし…」

生徒「そんなのありかよ」

スツキリしたいフアンタ

夏休みだよ【雄二先生】

翔子「雄二の話」

雄二「あー明日から夏休み…」

雄二「の!!」

雄二「ハズだがあ」

康太「気合服にチェンジ」

雄二「お前らが遅刻や居眠りをするせいでロスタイムが有り余って
んだから」

ロスタイム15日間

雄二「一学期の続行だあ」

生徒『ズコオ』

生徒『もういや~~~~~』

フアンタ

さっぱりピーチでた

病院での手術

く集中治療室前く

「明久!!しっかりして」「アツキー!!死んじやだよ」「明久君!!意識をしっかり」「明久…頑張れ…」

看護婦「どいてください、急いでますから」ガラガラガラ

「吉井…」「大丈夫…だよな…」「吉井君…」「畜生…」

パツ

手術中の文字に赤いランプが着いた

Aクラスの全員がいる中一人の先生が来た

鉄人「高橋先生、吉井の容体は…」

高橋「詳しくは分かりません…しかし、見ただけでも腕はダメになっっているそうです。」

鉄人「そ…そんな…」

モブ「畜生…畜生…畜生畜生畜生おおおお、なんで吉井なんだよ!!あいつがなんで傷を負わなきゃいけないんだよ!!あいつが一番無理して頑張ったんだぞ!!吉井のお陰で俺たち全員が無傷なんだぞ!!なのに一番頑張った吉井がなんで一番辛い目に合わなきゃいけないんだよ!!」

「落ち着けよ」

「なんで落ち着いていられるんだよ」

「落ち着けてる訳ねえだろ!!みんなそう思ってるに決まってるんだろ!!

なんで…なんで吉井なんだよ…」

翔子「みんな…落ち着いて…明久の手術を待とう…」

「代表…泣いてるわよ…」

翔子「それはみんなも同じ…私達は明久に頼りすぎていた…明久からもらったものはなに?」

全員『……………』

翔子「数えきれないと思う…でもその分…」

「心の中の明久が大きいはず」

翔子「だから…皆んなで待とう」

『うん（はい）（おう）』

く合宿所く

「なんでAクラスはいないの〜?」「なんか事故つたらしいよ」「え〜で、どうなったの?」「なんか重傷らしいよ」「怖いね〜」「全くだわ」

雄二「なるほどな、だからAクラスはいないのか」

秀吉「明久や姉上達は大丈夫じゃろうか」

雄二「ムツツリーニ、誰が重傷したかわかるか?」

康太「悪い聞こえなかった」

雄二「そうか…まあ、あいつらは頑丈だから大丈夫だろ。」

秀吉「そうじゃな…」

FFF団「Aクラスが事故つたらしい」「重傷者がいるらしい」「男だといいな」「吉井だとさらにな」

島田「作戦は成功したそうね…」

姫路「でも死人は一人も出てないそうですのー」

島田「そこだけが失敗ね」

く病院く

「先生…この人はもう…」

「手遅れだったそうですね…聞いた話ではすごくいい子でこの日本の未来を託したいほどの子だったのですが…」

「で、でもこの子は始める前からほとんどダメだったし…先生のせいじゃありませんよ」

「人生とは残酷ですね。こんないい子がいとも簡単に死んでしまう…私達は無力です…この子は…助けたかったです…」

「せ、先生…」

く天界く

明久「ん？ここはどこだ？」

？「来たか!!吉井明久!!」

明久「だ、誰ですか？」

？「ん？私か？」

「私は神である!!」

天界での修行

く天界く

明久「あなたが…神様…」

神「そうさ、私が神である」

明久「じゃあ僕は死んじやっただね」

神「んにや、死んでないぞ」

明久「ふへえ？でも天界は天国じゃ」

神「ああ、天界は『天界』天国を越える神の領域って所だ」

明久「なぜ僕がそんなところに…」

神「そうそう、君が死んだら天界ここにに来てもらうよ」

明久「やつぱり死んでるんじや」

神「いやいやまだ死んでないよ、今君は気を失っているだけ」

明久「でもここにこれるのは死んだ人だけなんじや」

神「君を連れて来たのさ、君は死んだら神の一人になってももらうよ」

明久「え、ええええええええええええええええええ」

神「そんなに驚くことをないだろ。あれだけのことをしているんだから」

明久「で、でも僕にそんな資格が」

神「ああんもうめんどくさいなあ、本題に入るよ」

神「今の君は内臓も骨も外傷も酷くて、ほぼ歩けないどころか体を自分の意志で動かすことさえもが困難な状態」

明久「そんな…」

神「だが!! 特別に治しといてあげたよ。」

明久「!!!!!!!!!!」

神「でもごめんねく全回復は無理だったよ」

神「髪の毛もアルビノ状態になっちゃって」

明久「いえいえ、助けてもらっただけでもありがたいです」

神「右腕はもうほとんど使えない状態で片目も見えなくなってる状態、足ももう歩くことは無理そうだね」

明久「でも歩けるんですよね。それだけで十分ですよ」

神「でもこのままでは神の威厳がすたるってもんだから、おまけをしておいたよ」

明久「おまけ？」

神「そう、首にチョーカーをつけといたからいざという時押してみな、召喚獣と合体できるから」

明久「合体ですか!!すごいですね」

神「それに目を代理をいれておいたから」

明久「ありがとうございます」

神「でも普段は眼帯付けておいてね。あまりにも強力だから」

明久「?はい…」

神「そして君にはもっと強くなるために色々な人たちを連れて来たよ!!」

『そろそろ』他の作品の方々

神「さあ、がんばろう」

明久「え、えつとお…何をがんばるんで…」

神「何つて『特訓』だよ」

神「と言つても時間はかからないよ、はい」

神の手から出てきた光の球が明久のお腹に当たりどんどんお腹の中に入っていく

明久「えつと…これは？」

神「人外の能力は無理だったけどそれ以外の彼らの技を教えといたよ」

神「後は彼らから話でも聞いときな」

明久「はい」タツ

浦原「教えなくてよかつたんですか?犯人」

神「彼が聞かなかつたからな、聞いてきたら教えようと思う」

浦原「そうですか………」

くく病院く

鉄人「もう一日経つ、寝られる所がないから合宿所について来い」

「で、でも」「よ、吉井が…」「まだ…」

鉄人「吉井が心配なのはわかるが今日はもう遅い、病院側にも迷惑がかかる」

『は、はい…』

優子「明久…」

愛子「アツキー…」

翔子「明久…」

久保「明久君…」

ゾロゾロゾロ

鉄人（Aクラスの奴らがここまで好むとはな…あいつには人と接するのが得意なのかもな…）

く合宿所く

「Aクラスが帰ってきたぞー」

「なんだ…」「今きたのか…」「どんな事故だったんだろう…」「ざわざわ

島田「チツ、沢山いすぎて誰が重傷か分からないじゃない」

姫路「とりあえず泥棒猫が重傷ならそこそこOKですね」

雄二「翔子!!」

秀吉「姉上!!」

康太「工藤!!」

島田「あいつ等が行ったわね」

姫路「着いて行きましようか」

「おいおい、皆んなどうしたんだ?」「目が死んでやがる」「何が起きたんだ?」

雄二「翔子!!」

秀吉「姉上!!」

康太「工藤!!」

翔子「…あ…雄二…」

雄二「無事だったんだな」

優子「ひで…よし…」

秀吉「無事じゃたのじやな」
愛子「ムツ：ツリーニ：くん……」
康太「大丈夫か？」
島田「あいつらは生きてたのね」
姫路「悔しいですわ」
島田「所で肝心のアキは？」
姫路「そう言えば見かけませんね？」
翔子「ゆうじ：明久が……」
雄二「明久かどうした!!」
優子「引かれたのよ」
秀吉「な、なんじやと!!」
愛子「僕たちをかばって」
康太「無事なのか？」
翔子「わからない……」
姫路「そ：そんな……」
島田「ア、アキが……」
雄二「クソお」
秀吉「どこ行くのじやあ雄二!!」
雄二「決まってるだろ!!病院だよ」
康太「無駄だ!!もう閉まってるはずだ……」
雄二「クソお……畜生……」
島田「なんで……アキが……」
姫路「なんてですか？」
翔子「バスがスリップしてそれを明久が止めたの」
秀吉「どうやってなのじや?」
優子「召喚獣を使ってさ……高橋先生が承認して」
康太「それじゃあ明久は……」
愛子「観察処分者だから」
雄二「フィードバックでか……」
島田「：チツ、なんであんだ達が生きてるのよ!!あんだ達が代わり
に引かれなさいよ!!」

雄二「おい、島田!!」

姫路「美波ちゃんの言う通りです。明久じゃなくてなんであなた達がここにいるんですか!!」

秀吉「落ち着くのじゃ姫路」

翔子「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

島田「あんた達なんて…」

姫路「死んじゃえばいいんです…」

康太「言い過ぎだ!!二人とも」

島田「いこ!!瑞希」

姫路「そうですね美波ちゃん、こんな人たちの顔を見ていたくないですわ」

雄二「言い過ぎだぞてめえら!!」

翔子「雄二…いいの…私が悪いんだから…」

雄二「…クツ…」

先生「皆さん、色々ありますが消灯時間ですのでもう寝て下さい
—————

く天界く

神「もういいかい?明久君」

明久「ええ、ありがとうございます」

神「じゃあ球磨川君、お願いね」

球磨川「仕方ないなあ『大嘘付き』『明久君の死をなかった事に』
シユン

神「いつちやったな…」

球磨川「神様、教えなくて良かったんですか?犯人」

神「彼は知りたく無いでしょう」

球磨川「所で誰が犯人なんですか?」

神「島田美波と姫路瑞樹だよ」

球磨川「あの二人がなぜ?」

神「嫉妬らしい、Aクラスの全員を殺せば明久君がAクラスからF
クラスに移ってくれるんじゃないかと」

球磨川「なるほど…」(と言う事らしいよ明久君)

く病院く

神『くないかとく』

球磨川『なるほど…』

明久「あの二人が犯人だったなんてな…悲しいな…友達だと思ってたのに…」

く回想く

球磨川「明久君」

明久「なんですか？球磨川さん」

球磨川「はつはー僕の事は呼び捨てでいいといっているのに…まあいいや、ところでさ…事件の真相知りたくない？」

明久「事件!! 事故じゃないんですか!!」

球磨川「知りたいならこのスピーカーを持って」

明久「これは？」

球磨川「あつちについていたらすぐに壊れちゃうけど、事件の真相ぐらいは知れると思うよ」

明久「ありがとう、球磨川さん」

球磨川「はつはー例には及ばないさ」

く回想終了く

先生「残念だが彼はもう…うをお!!」

看護婦「先生どうしましたか？」

明久「先生、手術ありがとうございました」

先生「礼には及ばんが、無事なのかい？」

明久「ええ、右腕と両足以外は…」

先生「そうかい…じゃあレントゲンを撮るからきてくれるかい？」

明久「はい」クル

先生「!!そ、その目は…」

明久「ちよつとありましてね…」青緑色

先生「そ、そうかい…髪の毛はアルビノ状態だけごめんね」

明久「いえ、命あつての僕ですから」

先生「それじゃあレントゲンの準備をして来るから、待っていてくれるかい」

明久「はい」

ガチャン

看護婦「先生良かったですね。あの子が生きていて」

先生「ああ、だがしかし植物人間を覚悟していたのに……」

看護婦「先生の腕が良かったんですよ」

先生「それにあの落ち着きよう……自分があれだけ変わったのに全く微動だにしてなかった」

先生（あの目はなんなんだ？視力を失ったと思ったのだが……色が変わっているなんて……だけど心配には及ばないだろう、彼の目は皆なを恨んでる目では無かった……むしろこれまでよりも守ると誓っているそんな目をしていた……それはまるで）

全てを包み込む海のような目をしていた

帰って来た男

明久「先生、僕の体はどうですか？」

先生「右腕はダメになってるね。もうほとんど動かないだろう」

先生「あとは足だね、歩くことはできても走るのはよしといった方がいいだろうね」

先生「あとは髪はアルビノ状態だね、その目や内臓については君の回復力がすごいってことにしておくよ」

明久「ありがとうございます」

先生「合宿所まで送ろう、その足じゃあ山は大変だろう」

明久「ありがとうございます何かから何まで」

先生「いいって、患者を手厚く扱うのが病院で働く人の使命だ」

先生「それでは行きますから準備してください」

明久「はい、先生」

〈合宿所〉

鉄人「Aクラスはどうしますか？全員が頼心状態ですが？」

モブ先生「そうですね…事故が怖かったのでしょうか？」

福原「それもあるでしょうが一番は円の中心点を失ったことでしょう」

モブ先生「円の中心点？」

福原「吉井君のことです」

モブ先生「確かに彼は観察処分者だけど、テストの点数は首席を超えているが、彼はまだAクラスになったばかりですよ、いきなりみんなと仲良くできるとは到底…」

高橋「いいえ、彼はAクラスを引っ張っているリーダーです。今日だってみんな来るのが早かったんですよ？去年度と比べて格別に…それにバス内でも彼が盛り上げてくれましたし…彼は普通の人では持てない何かを持ってるんでしょう…」

高橋(泣)「なのにあんなめに…彼はあんなに頑張ったのに…私は教師なのに…何もできなかったのが…非常に悔しい…私に腹が立ちます…」

「カヲル「はあ、西村、高橋を連れていきな」

西村「はい…高橋先生、少し外へ」

高橋「ありがとうございます」

カヲル「結局あれは事故なのかい？」

モブ先生「分かりません…吉井君が止めてくれましたがあらゆるところが壊れていて、その原因は事故のものなので事故と考えるのが普通かと」

カヲル「とりあえずめんどくさいことにh『プルルルルル　プルルルル』なんさね」ガチャ

医者「もしもし、文月学園の方ですか？」

カヲル「でなきや電話には出れんさね」

医者「吉井君ことですが、今そつちに連れていってます」

カヲル「!!!!」ガタ

医者「色々その後遺症がありますが彼は元気です、校門前に先生をお願いします」

カヲル「あと何分ぐらいさね」

医者「5分もかからないと思います」

医者「では」プープープー

カヲル「……………」ガチャ

モブ先生「なんの電話だったんですか？」

カヲル「この会議が無駄だったってことさね」

西村「失礼します」

高橋「し、失礼します」

カヲル「ちようどさね、2人とも校門前に立ってな」

西村&高橋「は、はい…」

—————

高橋「何なんでしょうか？校門前に立たせて」

西村「ん、車が来ますね」

高橋「お客でしょうか？」

「ありがとうございます」

「いやいや、このあとも頑張るんだよ」

「はい」

「ここからは車では行きにくいから歩いて送ろう」

「いえ、十分です?」

「いいよ、説明も必要だからね」

「そうですか?ではお願いします」

トコトコトコ

西村「お、お前…」

高橋「よ、吉井君…」

明久「お久しぶりです、西村先生、高橋先生」

西村「なんだ?その髪は」

医者「あとで説明します。吉井君はもういつてもいいですよ」

西村「そうだ、坂本達を呼んでこよう、親友だよなお前らは」

明久「あ、西村先生、雄二達は確かに親友ですけど…行かなきゃいけないところがあるんです…どこよりも1番に…」

高橋「吉井君…生きてて良かったです」グスン

明久「高橋先生、笑ってください、泣いてる先生よりも笑っている先生の方が好きですよ。俺もみんなも」

高橋「…ええ、そうですね」

西村「では先生(医者)こちらへどうぞ、職員室に案内します」

医者「ええ、ありがとうございます」

高橋「吉井君…あの子達をよろしくお願いします」

明久「任せてください」

こうして僕はAクラスへと、足を運んだ

復活せよAクラス

〜Aクラス〜

ドヨ〜〜〜〜〜〜〜〜ン

「ブツブツブツブツブツ（ry）」

Aクラスの宿場は暗い空気が流れ込んでいた。

それは何mも離れている明久でも分かるほどだ。

明久「さて…この状況はどうするかな？」

〜少年移動中〜

明久「ただいま〜♪」

ドヨ〜〜〜〜〜〜〜〜ン

明久「あつちやく、これは聞こえてないな…仕方ない」

壁ドン

ビク

「あ、あれ？吉井？」

「何でここにいるの？」

「決まってるさ、幻覚だろ」

「そ、そうなのか〜」

明久「いい加減にしろよ!!!」

明久「確かに僕は怪我をした…」

明久「でもそれだけだろ!!僕がいなくてもこのクラスは強いはずだ!!!」

明久「!!」

!!

明久「こんなクラスじゃ僕は安心できない…」

明久「安心させたかったら元気に振る舞ってくれよ!!」

明久「笑顔で僕を迎えてくれよ!!」

.....

明久「翔子ちゃん…」

「いめんさい」

翔子「私達は明久が心配だった…明久を信じていることができなかつた…ごめんなさい、あなたを悲しませて…ごめんなさい」

優子「そうね、明久がこんなのでくたばるわけないものね」

明久「優子…」

愛子「そうだね、今までの経験からしても明久君は強いから…僕らのリーダーだから」

明久「愛子ちゃん…」

「そうだよな」「あの吉井君だもん」「心配するだけ失礼してもんだな」
ガヤガヤ

明久「みんな…」

久保「さあみんな明久君の復活を祝おう」

明久「(…：みんな…涙ぐんでいるのバレバレだよ…)」

明久「その前にちよつといいかな？」

「ん？なんだ」「別にいいけど」

明久「みんな…僕の心配してくれてありがとう。そしてさ…」

「ただいま、

みんな」

確かに僕は無茶をした。でもこの無茶には後悔もなにも無い

例え神様に助けてもらえなくても僕は後悔をしなかつただろう。
なぜなら

『お帰りなさい、明久(吉井)(君)』ニィ

この満開な笑顔で迎えてくれる仲間達が無事だからね

「でも本当に良かったよー」「あれ、今更だけどその髪どうしたの？」
「うわっ白いよ…：老けた？」

明久「そんなわけないだろ！」

ハッハッハ

「でも大丈夫なの？」「確かに杖とかついてるし」

明久「今日は最終日だったかな？」

愛子「そういえばそうだね、なにもしてないけど」

明久「そうか…」

優子「明久、どこ行くの？」

明久「少しね」

翔子「早めに戻ってきてね…みんな待ってる…」

明久「了解です、代表」

翔子「代表はほとんど明久みたいなものだよ…」クス

明久「そうやって笑ってて欲しいな」

翔子「／／／」

明久「じゃあいつてくる」

タツタツタツ

さて…どうしようか…あの二人を…僕は許せない。あの二人を許せない。

る」

「壊してや

決戦 僕は君たちを許さない

さてとあの二人を呼ぶか…

少年少女(屑)×2 移動中

島田「アキ!! あんた無事だったのね」

姫路「心配したんですよ、明久君」

明久「心配してくれてありがとうね」

「島田さん、姫路さ

ん」

島田「アキ、あんた、私のことは美波って呼びなさいって言ったでしよ」

姫路「私も瑞希って呼んで下さい」

姫路「それより大丈夫なんですか? 怪我は」

島田「Aクラスというからそうなるのよ、早く私達のところにもど」
「どの口がそんなことを言ってるんだ?」

姫路&島田「え!!」

明久「分かってんだよ、犯人があんた等ってことは」

島田「ち、違うわ…アキを殺そうとするつもりは…」

姫路「そうです…ただ明久君の近くをうろつくAクラスを…」

明久「つまりそれは…Aクラスのみんなを殺すつもりだったんだよな」

島田「だって…邪魔だったんだもん」

島田「前みたいな関係が良かったのに…みんなでバカやりたかったのに…Aクラスが邪魔をした!! 私は邪魔されなくなかったから邪魔する奴等を消そうとしただけよ」

姫路「そうです、美波ちゃんが悪くありません。裏切った明久君と

Aクラスが悪いんです」

明久「わかった…もうしゃべるなゴミムシ」

島田「なっ…」

姫路「なにをいうんですか…明久君…」

明久「これからゴミを処分するだけだ」

島田「そのゴミは私達なわけ…」

明久「他になんがある」

島田「アキ…あんたを絶対許さない!!」

姫路「私もです!!」

明久「なにいつてるの？君たちは僕だけならまだしもAクラス全員を殺そうとしたんだ」

明久「許せないのはこっちの方だ!!」

チョーカースイッチオン

キュイイイイン

島田「なんで…フィールドが…」

姫路「教師もいないのに…」

明久「サモン」

ペア

明久「なるほど、このチョーカーのスイッチを入れるとフィールドが展開され、自動的に合体するのか…」

島田「なんなのよ…それ」

姫路「召喚獣と合体している？」

明久「腕輪発動【虹色装備】」

ペア

明久「(この右目…)」

「危険だから気をつけてね。能力は…」

明久「(今しか無い)」ブチ

島田「戦う気ね…いいわよ」

姫路「絶対に負けませんから」

「サモン」

ペア

島田「こっちは合体しないのね」

姫路「いいですよ別に、いきましよう」

島田「観念しなさい。アキ」

「JET銃」

ドガアアアアン

島田「な、なにが起つたの」

姫路「あれ？美波ちゃんの召喚獣がいません」

島田「え」

振り返ると島田の召喚獣は壁に埋まっていた

姫路「明久君…なんなんですか、その煙…」

明久「別に…ただのパワーUPさ」

「あいつ等が敵でいいのか？」

明久「はい、だから…力を貸して下さい」

「ルフィさん」

ブチ切れ

彼の右目に宿る物その名は「海眼かいがん」海のように深く有りそのまま全てを飲み込み包み込み

故に海眼

また、この眼は自然に手にはいる物ではなく、天界に逝きその中でも選ばれた物が入れることが出来る。

天界、冥界では珍しいと騒がれる、しかしこの世では知ることすらできないのである。

しかしそれなりのデメリットもある、この眼に耐えきれぬ者が多い普通ならその眼の周りが眼のあらゆる力により消滅するだろう。手に入れた者は無事だが移植などをすると大抵は相手が消滅する

そこまでの珍しさ、デメリットがあるにも関わらず我が物にしようとし、その眼の持ち主を争い戦争が起きる事もある。

そこまでして皆が欲する能力それは

【転生合体】

この能力は相手が許可、またはかなりの信頼を得ているとその人の能力・体質・知力などの全てを得る事が出来る。

しかしそれは永遠ではない。

眼の所持者または呼ばれた者のどちらかが終わらせようとするれば終わらせる事が出来る。

得られる能力は本人の気力と体力、体の強度で決まる

能力が高い分使うのにはかなり困難な代物であるから本来は神ぐらいしか使えるはずがない。

そう：「彼」は規格外なのだ

明久「待たずに畳み掛けますよ」

ルフィ『ならあれだな』

『JET乱打銃』
ジェットガトリンダ

姫路「きやあ」

島田「よくも瑞希を、くらいなさい」

シユン

島田「あ、あれ？」

『JET銃弾』
ジェットブレット

島田「かはア」

姫路「美波ちゃん、許せません」

腕輪発動【熱線】

明久『転生』

『お前等の人を好きかってするのが日常なら』

上条『その幻想をぶち殺す』

パキイン

姫路「そんな、私の熱線が…」

『竜王の顎』

姫路「なに…それ…」

ガアアアア

姫路「キヤアアアアアアアアアアアアアアア」

島田「瑞希を離しなさい」

明久「普通に腕輪の能力も使えるんだよ」

明久『青色』水『ハイドルカノン』

ブシヤアア

島田「ガハッ」

姫路「お、溺れ…」ブクブクブク

「おい、なんの音だ？」「かなり大きい音だったよな」

明久「人が集まって来ている…騒ぎすぎたか…」

『転生』

『どんな理由があろうと』

シャンクス『仲間を傷つけるやつは許さない』

『「覇王色の覇気」』

ズワアアア

「なん…だ」「きゆうにめまいが…」「意識が…」

バタバタバタ

明久「ふー危なかった。」

シャンクス『手荒だが良かったのか?』

明久「気絶したただし大丈夫ですよ」

姫路「ガハア、ガハ、明久君はどうしてそんなに変わってしまったんですか?」

島田「やっぱりAクラスよね、Aクラスのせいなのよね。だから優しいアキがここまで私達に」

明久「……………」

「なにを言ってるの?」

「僕はお前等を許さないよ」

「いや…許せる行為ではない!!」

「Aクラスのせい?」

「お前等がいつも攻撃してくるからだろ」

「しかも今回は僕だけじゃなくAクラス全体を巻き込んだんだぞ」

「怪我人が僕だけだったからいい物の他の人が怪我をしたら…いや下手したらしんでいたんだぞ」

「それなのにAクラスのせいで僕がおかしくなっただと」

「笑わせるな!!」

「この殺人鬼共があ」

島田「ツ…そうよ!! Aクラスを殺す気でやったのよなのにアキ、あんたが邪魔した。」

島田「私はアキが近くにいてくれればなんにもいらぬ。Aクラスなんて喜んで殺すわよ」

姫路「そうです。明久を取り戻すためならなんでもやるんですよ、こんなに愛しているのになんで何処か行ってしまっんですか?」

姫路「2年生の時みたいにFクラスでバカしましよようよ」

明久「もういいしやべるな：お前等みたいな殺人鬼と一緒にいたくもない」

「だからさ」

「キレテモイイヨネ」

『お姉ちゃん達が遊んでくれるの?』

『お姉ちゃん達が新しいおもちゃなの?』

『お姉ちゃん達が明久をいじめめるの?』

『明久をいじめるんだったら』

フラン『私、お姉ちゃん達を許さないよ』

決着暴走する者止める者

フラン『お姉ちゃん達だよね、明久が言ってたよく暴力をしてくる人たちって』

フラン『私ね、好きな物はね壊したくないの。だから…』

『私お姉ちゃん達と遊ぶ!!』

島田「な、なによこの声」

姫路「薄気味悪いです…」

明久「余所見している暇はあるのかな？」

〜島田視点〜

別に余所見をしていた訳じゃない。

声が聞こえたから辺りを気にしただけだった。

そしたら声が聞こえた。

それは地獄からの使者のような声で

「余所見をしている暇はあるのかな？」

そう、ほんの一瞬の出来事だった

〜時は元通りに姫路視点〜

バアアアアン

姫路「美波ちゃん!!」

姫路はまるで何が起こったかがわからない様な…否本当にわからずわかる事は3つ

1つは島田が飛んでつたこと

2つは明久が近くにいること

3つは…

ここにはいけないこと

でもこの事が分かったこのには飛ばされていた

ゲホッゲホッ

籠目籠目

辺りが煙くて見えない私にこの声が聞こえてきた。

籠の中の鳥は

懐かしい：小さい頃によく遊んだ

いついつ出やる

『かごめかごめ』だ

煙が晴れてきた

辺り一体には

緑の光をはなっている物が全面にあった

後ろの正面だくあくれく

一斉に襲いかかってきた

く時は進み島田視点く

大きな爆音が聞こえ私は目覚めた

辺りを見ると瑞希が血を流して倒れていた

私は状況が理解できていなかったが

不可解な事がたくさんあった

私の前左右に十字を刻む光回りながら動く二つの十字

私は何も出来る事なくこの光に焼かれた

く時は進み明久視点く
まだだあ…まだまだ…
俺もフランも力が溜まっていて今にも爆発しそうな気がした…
気だけでは済まなかった…
フランの中にある『495年の波紋』が爆発した

気が戻った頃には合宿所はボロボロ
あの2人も虫の息
でもダメだ

止めなくては
フランの中にある狂気が僕にそう語る
拒む事はできなかった
勝手に口が動く

「『禁忌「フォーオブアカインド」』」
そのあと四人の僕は口を揃えていう

「『『『禁忌「レーヴァテイン」』』』』」

手に光の槍が差し掛かる
その手を振り上げて僕は

「そこまでよ」

四人の手にあつた光の槍が消えた、そのあと

僕達が吹っ飛んだ

「紅符「スカーレットシユート」」

「幻象「ルナクロック」」

「金符「シルバードラゴン」」

「幻符「華想夢葛」」

シユウウウウウウ

そのあと僕の中のフランが消えて

フラン「大丈夫？明久お兄ちゃん？」

目の前に現れた

事の顛末によると神様がフランの狂気の暴走を感じフランを僕から引き剥がそうとしたが剥がれず

直接僕を止めてから引き剥がしたそうだ。

レミリア「全く、『495年の波紋』だけでもギリギリだったのよ、私の能力がうまく機能したからいい物の」

彼女はレミリア・スカーレット紅魔館の主で吸血鬼

フラン「お姉様ごめんなさい」

この子はフランドール・スカーレットレミリアの妹で吸血鬼、中には狂気という恐ろしい物を宿している

咲夜「まあまあ、いいじゃないですか。みなさんが無事なんだから」

彼女は十六夜咲夜いざよいさくやこの紅魔館のメイド長である。普通とはいいいくいが人間である

「もう終わったんでしょ、先帰っててもいい?」

彼女はパチユリー・ノーレッジこの紅魔館の主レミリアの親友、図書館を借りて暮らしている魔法使い

「明久君、回復したら暇なので組手しませんか?」

彼女は紅ほん美鈴めいりん紅魔館の番人……よく寝ているが…

このメンツが選ばれたのは……作画上らしい(紅魔館兼紅魔郷メンバー)

明久「みんなありがとね」ニコ

レミリア「べ、別に明久のためじゃ…／＼」

咲夜「その笑顔は反則ですね／＼」

パチエ「まあ…悪い気はしない…／＼」

美鈴「さあ、組手しましょう」

フラン「ごめんねーお兄ちゃん」だき

レミ&咲夜&パチエ「「なあ!?!」」

レミリア「フラン!! うらやまsじゃない帰るわよ」

咲夜「お嬢様方はお眠りの時間ですわよ」

パチエ「だから早く帰ろうって言ったのに」

美鈴「え、もう帰るんですか?」

明久「めーりんの言う通り、もう少しゆっくりして行けばいいのに」

レミリア「いいのよ、いろいろと準備もあるし」

そういうと紅魔館メンバーか帰って行った(多分幻想郷か天界に)

みんなが起きたら大騒ぎだった

このボロボロの合宿所

何故か病院にいる島田と姫路

明久の眼の色

しかしなんか色々騒がれたが全て迷宮入りした。

こうして僕の高校生活最後の合宿が終わった。

〈眼帯談〉

「明久君、なんで眼帯してたの?」

明久「なんかしといた方がいいんだって」

「じゃあ眼帯なくなったことだし作らないか？オリジナル品を」

「お、いいね」

「じゃあ眼帯は黒をベースに」

「やっぱAの字はいれたいよな」

がやがや

と言うわけで僕の眼帯はシンプルに黒をベースに金色の何かで「A」の字がついていた。

みんなが元気になっていて嬉しかった

卒業前の学園生活 姉の襲来

合宿が終わり、3年生の僕たちには大学受験や就活なのが迫ってくるこの頃

合宿が終わってから、Fクラス、特に美波と姫路さん二人からの嫌がらせがなくなってきた。

秀吉とムツツリー二はよく遊びに来ている、雄二は翔子さんを警戒してこないようだ。

雄二も気にせずこつちに来ればいいのになー

これからは特に大した用事もなくそれぞれの将来に向かって勉強をするだけだった。

みんな大学に行くらしいが同じ学校に行く人は今のところは雄二と翔子さんだけだろう、僕なんか大学いくか就職するかさえ迷っている

そんな忙しい中悲報が一つ

姉さんが帰ってくるらしい

別に勉強面に関しては構わないのだが、一番大事なのは交友関係なのだ

自慢だが僕の周りには女子が多い

(上条『まだまだだな』)

なんか声が聞こえたがスルーだ

さらには優子と付き合ってるという不純異性交遊真っ只中である

お金の面は少しはましになってきたと信じている、自分を

誰かが言った、自分が一番信用でき自分を一番知ってるのは自分だ

と by loten

lotenが誰なのかは置いといてこのままでは最悪自宅監禁+

お嫁(姉さん)にいけないチューをされかねない

ここで自分のすべきことは何か

明久「姉さんが帰ってきたから助けて」

心の友に頼むのみ

秀吉「姉上あねうえって前にきてたあの姉上か？」

康太「巨乳…美人の…」
「ブシヤアアアアア」

明久「ムツツリーニイイイイイイイイイイ」

雄二「でも今の学力なら対して問題はないんじゃないか？」

秀吉「霧島も越えてトップなんじゃろ？なら胸を張って迎えばよいじゃろ」

明久「学力のほうは大丈夫だと思うけど問題はさ…」

雄二「そおいや不純異性交遊はだめだったんだよな」

秀吉「それって姉上と付き合ってるから無理なのでは？」

康太「秀吉が義妹いもうと…ギリイ」

秀吉「ムツツリー二よ、今は明久のことじゃし、それなら姉上のほうをねたむのじゃ…」

明久「秀吉、明久なんて他人くさいから義おにいちゃん兄でいいんだよ。義妹いもうと」

秀吉「だれが義妹じゃ、呼ばんからな」

康太「兄さん、妹さんを、僕にください。」

明久「断る!!!」

雄二「すぐ来るわけでもないんだし、また後日ってことでいいよな。」

明久「そうだね、来るって書いてあっただけだからすぐは来ないと思えよ」

雄二「ほんじゃ先に帰るわ」

「二二んじゃまたね」

家に帰ると

明久「あれ？鍵が開いてる、開けっ放しできちやったかなあ？」

明久「あれ？見慣れないハイヒールだな？秀吉へのプレゼントだったけ？」

明久「あれ？ロビーにキャリーが置いてある、押し入れからだしてたかな…」

明久「風呂場がぬれてるなあまさか」

「アキ君、帰ってきてたんですか」
そこにいたのは

玲「一声かけてくださいね。」
バスタオル一枚の姉さんがいた

姉弟の上の方は下の方のことを大体知っている

まさか報告受けてから1日で来るなんて誰が考える
しかし対策なんて今日する予定だった僕にできることは何かある
のだろうか

答えはないだ

姉さんには友人関係は2年生のころまでしかばれていない
つまりみんな友達って思われてるはずだ

勉強に関してはテストを見せれば問題ない

聖書はデスノート張りの隠し方をしておいた

あとは雄二たちに口裏を合わせてもらって関係をごまかしてもら
うだけだ

しかし問題がある

僕の姿と姫路さんと美波のことだ

と言っても僕の姿は

あきら「姉さんがいないうちにあきくんが髪を染めて眼帯して不良
と中二病を一齐に発生させて（ry）」

といういろと言っていたがバス事故のことを話すと

あきら「あきくんは自分を犠牲にしすぎです。他人を犠牲にしろと
は言いません、せめて自分を大切にしてください。」

と言われた、姉さんはなんやかんやで僕のことを思ってくれてい
る。

こういう時、僕のことを心から思ってくれる姉さんのことがぼくは
「私をあきくんのこと好きですよ」話の途中で心を読んできた姉さん
は嫌いだ。

あきら「あきくんが不良にも中二病にも走ってないことはわかりま
した」

明久「わかってってくれてうれしいよ。3時間もかかったけど」

あきら「ですがあきくん」

明久「なに？」

あきら「話すことがあるんじゃないですか？」

明久「それって勉強？まさか友人関係とかいうの？前と変わってないよ」

あきら「その話はまた今度します。今は別のことです」
明久「別のこと？」

あきら「それ以外にもあったんですよね？合宿で」

その時僕はびくつとした、姉さんの鋭さにだ

僕はどっちはわからなかった、僕の眼の力に関してか姫路さんと美波に関してなのか

あきら「全部話してください」

僕は姉さんにすべてを話した

合宿であったすべてをだ。

くくくああ〜心がびよんびよんするんじゃ〜くくく

あきら「なるほど…わかりました」

すべてを話した後にもかかわらず姉さんは冷静だった

あきら「まさか瑞樹ちゃんと美波ちゃんがそんなことをするなんて…」

さすがの姉さんもそこだけは驚いたようだった

あきら「確かに悪いことをしたのも悪いのも二人だと思います。」

「でも全部が悪いわけではないと思います。」

そういわれた僕は驚いた。反論をしようとするも姉さんの威圧がすごく口を出せなかった。

あきら「気づいていたんではないですか？二人の好意に」

そういわれた僕は口すら動けなくなつた

凶星を突かれたかのように

あきら「あきくんが気づきながらも二人のことを気にしなかったことも悪いと思います。」

そうだ 僕は二人の好意に気づきながらも無視をしていた、怖かつた今までの関係が崩れるのが、それゆえに僕は二人のことを放置した

んだ。そして僕はだんだん自分に堂々としていて自分に嘘をつかない、本当に自分のために生きてる感じがした優子にあこがれ、惚れたのもその時だった。

あきら「しかし女の子二人から好意をもらってるあきくんはお仕置きですね」

あれ？ イイハナシダナーで終わると思ったのに

あきら「それにあきくんがその好意を受け取ってないのはどういう事でしょうか？」

あ、これ全部ばれちゃってる感じでしょか？

あきら「全部話してもらいます。今夜は寝させませんよ♡」

やだ、何それこゝ

そして僕が寝たのは午前3時過ぎだった

やはりこの学校が平和になることはない

明久「やばい寝坊した〜」

午前3時に寝始めた僕は起きるのが11時になってしまいこれで完全遅刻になってしまった

明久「姉さんも寝てるし これ急がないと鉄人に殺されかねない！」

僕はそう言いながら急いで着替える

携帯を見ると雄二や秀吉 ムッツリーニや優子 愛子 翔子などのAクラスのメンツから心配するメールが届いていた

明久「返信は学校ついてからでいいよね 急がないといけないし」
学校行つて直接話すことを考えない明久^{バカ}であつた

明久「行つてきま〜す」

素晴らしい彼は家を出ていく

今学校で起こつてる事なんて分からずに

〜学校 Fクラス〜

時刻10:50 2時間目途中

翔子にも聞いたが明久のやつ学校に来てないらしい
あいつが遅刻とは3年になってからは珍しいもんだ

普通に考えればあの怪我だし病院に行つてきてるのかもしれない
が

にしても暇だ 今日明久は遅刻で鉄人は出張だから授業を途中で抜けて馬鹿やつてもいいが明久がいないからどうも盛り上がりらん

Fの連中も明久^{バカ}がAクラスに行けたということややる気を出している あいつには元々才能があつたからなんだがなw

にしても最近姫路と島田の奴が妙に静かだな

合宿が終わつてからあたりからか

放心してるといか反省してるといか

流星にあれだけの怪我をしている明久に攻撃はしないらしいな、随

分と丸くなっか気がするが

そんな途方もないことを考えていると廊下から足音が聞こえ始める

康太「雄二…」

雄二「わかってる…誰だこの足音」

康太「5人だ…学校のものではない」

人数と誰かを当てるなんて驚いた

そして足音が止まった

数秒後

「手を挙げるガキ共オオオ」

拳銃を持った男が入ってきた

まずい 拳銃は予想外だ

強盗の可能性は考えていたが武器は持ってて斧あたりだと思つた

俺以外にも動こうとした奴はいたが流石に拳銃にはビビっている

俺たちはおとなしく両手を挙げた

「だ、誰なんだ君たちは！」

授業をしていた先生がテンプレな質問をする

このクラスだけではないのか となりやほかのクラス 下の学年

の方からも声が聞こえる

自惚れではなく一番戦闘や荒事に特化してるのは俺らのクラスだと思つている

このクラス以外にもいるテロリスト全員が拳銃を持っていると考えるのかなりやばい

それに今日は最強の鉄人もいない 状況は圧倒的に不利である

「まずはその二人の女は付いてきてもらおう」

素晴らしい姫路と島田は一人の男に引つ張られていく

無抵抗にだ 流石におかしいと思ひ声を掛けようとしたが

「てめえはここで座つてろ」

と拳銃を向けられる

そして一人がはトランシーバーを取り出し通信をする

「ああ、やっぱりここのクラスのガキが一番威勢がいい あいつの言った通りだ」

『ならそつちの方に拳銃を持って行って正解だな 体育館に集合させろ』

「了解」

最悪だ 今話を聞く限り情報が流れている 最悪裏切り者がこの学校にいる

俺たちは聞こえない声でしゃべる

須藤（雄二、相手は4人で拳銃持ちが3人どうする）

雄二（今はいうことを聞くしかねえ 2人までならまだしも3人だとだれかが死にかねん それに一人はかなり後ろの方にいやがる あの場合だと撃たれる方が速い）

須藤（じゃあどうすんだ このままだと）

雄二（隙ができたなら合図する 全員それでいいか）

Fクラス（了解）

康太（雄二：テロリスト人数はだいたい50〜60かなりの人数のうち以外はだいたい3人くらいいる そのうち拳銃持ちは10人うち以外はAクラスと他学年のE、Fに行ってる）

雄二（流石だなムツツリーニ しかし50〜60人か かなり大掛かりなテロだな・・・）

俺らがそう話しているとテロリストの一人が

「てめえら廊下に出ろ 体育館に移動だ」

俺らは手を頭に付け廊下で並び体育館に向かうため廊下を歩く

体育館に行くには階段を下りて廊下を歩く 隙があるとすれば連行中だ 体育館に行けば最悪60人と相手にしなきゃならねえ

移動中にケリをつける

運のいいことにうちのクラスが最後に連れて行かれるらしい

ムツツリーニによれば1年のA〜F2年A〜F3年A〜Fの順ら

しい

後ろから敵が来ることは無い この状態で最初に見えた光だった
そしてもうひとつの光

明久の遅刻だ あのバカは最高のタイミングでやらかしてくれ
いつ来るかが微妙だが俺はあいつにかけるしかなかった

11:00 1年Aクラスから体育館に移動